5 日記

単元のねらい

◆日記文学の特徴や成立の背景を理解する。
◆諧謔などの表現の工夫を味わう。
◆変体仮名を読む。

・仮名文字で書かれた日記文学の嚆矢である「土佐日記」の文学史上の位置と特徴、女性仮託という虚構の方法について理解する。
・諧謔表現を読み味わい、我が国の言語文化に特徴的な表現の技法とその効果について理解する。
・日本の伝統的な書記法であり、現代のひらがなに通じる変体仮名を読み、幅広く古典に対する関心を持つ。

生徒が初めて接する本格的な日記という文学形態を通じて、当時の旅の様子や作者の内面を理解させ、文字を読む楽しさや古典の世界の広がりを知ることをねらいとしている。

単元の構成

「土佐日記」より、「門出」「阿倍仲麻呂」「帰京」の三教材を取り上げた。作品の書き出しである「門出」と旅の帰着である「帰京」を併せ読むことで、作品の全体像と作者が日記に託した思いを知ることができるように配慮した。また、「阿倍仲麻呂」は、「百人一首」の歌人である阿倍仲麻呂の和歌にまつわる話で、我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について学習できる。

古典に関する文章「男の文章と女の文章」は、男性の書く日記と女性の書く日記の違い、紀貫之が女性仮託して「土佐日記」を書いた背景と意義について、親しみやすい文章で記しており、「土佐日記」について理解を深めることができる。

「古文の窓４　真名と仮名」では、日記が綴られた文字に着目し、日本語の文字の由来を学びつつ、その豊かさに気づかせる。

「単元の言語活動５　変体仮名を読む」では、変体仮名で記された「土佐日記」の「門出」の部分を題材にひとつひとつの字母を確認しながら読んでいく。

日記

教材のねらい

1 選定の理由

「土佐日記」は、仮名文で書かれた古典作品の最初期のものの一つであり、日本文学の歴史を理解するうえで欠かすことができない作品である。その中から「門出」「阿倍仲麻呂」「帰京」の三つの部分を扱う。これらは作品の特徴がよく表れた部分である。

橋本治「男と女の文章」は、最初の仮名日記である『土佐日記』はどのような意図のもと生まれたのか。また、それによってその後の女性による日記文学があることを理解できる教材である。

「単元の言語活動5変体仮名を読む」は、日本の伝統的な書記法を学び、幅広く古典に対する関心を持ってもらうことをねらいとしている。

2 指導のねらい

(1) 平安時代において男性と女性とは文学上、どのような違いがあったのかを理解させる。文体や内容の違いを整理し、そこからどうして紀貫之が女性仮託による文学作品を著すことになったのかを理解させる。

(2) 和歌や諧謔などの表現上の工夫を味わわせるとともに、我が国の文章史・文学史上の位置を理解させる。

(3) 旅への不安、望郷の念、子を亡くした親の心情などを読み取らせ、生徒自身の情操の涵養に寄与させる。

(4) 変体仮名を読むことで、仮名文字の成り立ちと文学の関係を理解させる。

3 単元の目標

目標について、別表「単元の目標一覧」をご確認ください。

4 評価規準

学習指導要領との対応等	評価規準例	〔知識・技能〕									現力等〕	
		(1)ア	(1)ウ	(1)エ	(1)オ	(2)ア	(2)イ	(2)ウ	(2)ウ	(2)エ	(2)オ	B (1)ア
		言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解している。	我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしている。	文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解している。	諸諸などの我が国の言語文化に特徴的な表現の技法とその効果について理解している。	我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解している。	古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解している。	古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解している。	古典の世界に親しんでいる。	時間の経過による文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解している。	言文一致体や和漢混交文など歴史的な文体の変化について理解を深めている。	「読むこと」において、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えている。
門出		○	○	○				○		○	○	○
阿倍仲麻呂		○	○	○	○	○				○	○	○
帰京		○	○	○				○		○	○	○
男の文章と女の文章		○	○	○					○	○	○	○
古文の窓４		○		○			○			○	○	
単元の言語活動５							○					

〔思考力・判断力・表		〔主体的に学習に取り組む態度〕
B (1) イ	B (1) エ	
「読むこと」において、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈している。	「読むこと」において、作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めている。	進んで日本文学の特徴や成立の背景を理解し、諧謔などの表現の工夫を味わい、学習課題に沿って女性に仮託した作者が日記でどのようなことを書こうとしたのか「男の文章と女の文章」を参考にして話し合おうとしている。
○	○	○
○	○	○
○	○	○
	○	

進んで日記文学の特徴や成立の背景や助動詞「べし」の意味と用法を理解し、学習課題に沿って、「青海原」「都にて」の歌に込められた心情を考え、作者が「青海原」の歌を引用した理由を話し合おうとしている。

進んで日記文学の特徴や成立の背景や、和歌などの表現の工夫を味わい、学習課題に沿って最後の一文と「土佐日記」の冒頭部分との対応について話し合おうとしている。

進んで日記文学の特徴や成立の背景や、平安時代の日記について、男性のものと女性のものの違いを理解し、学習の見通しをもって、平安時代の男性の日記について調べようとしている。

進んで日記文学の特徴や成立の背景、真名と仮名について理解し、今までの学習を生かして、変体仮名を読もうとしている。

■言語活動例との関連（【　】は関連する指導要領の言語活動例）

単元の言語活動５　変体仮名を読む【〔思・判・表〕B(2)ア】

日記

指導計画案

指導上の重点目標

【門出】
1 「土佐日記」の文章史・文学史上の位置を確認させる。
2 人物の心情を理解させる。
3 諧謔表現を理解させる。
4 女性に仮託するという虚構の方法について理解させる。
5 旅立ちにあたっての作者や人々の心情を考えさせる。

	学習活動	指導上の留意点
導入	❶「土佐日記」と作者紀貫之について調べてきたことを発表する。知技	❶ 文学史上初の仮名日記であること、作者は歌人としても著名であったことを確認させる。
展開	❶「門出」を音読する。思判表	❶ ルビのある語を正確に読むように指導し、間違っている場合は訂正する。
	❷ 重要古語の意味・用法を確認する。知技 ❸ 現代語訳し、内容を確認する。思判表	❷ 紛らわしい語の識別ができるようにする。また、古典常識に関わる語は体系的に理解させる。
	❹ 作者がどのような立場で書いているか、確認する。思判表	❹ 女性筆者は虚構で、作者自身を第三者として描いていることを理解させる。
	❺ 諧謔表現を読み味わう。知技 思判表 →「言葉と表現」1	❺ 諧謔表現がどのようなおもしろさを持つか説明させる。
まとめと発展	❶ 男性の日記と女性の日記のあり方の違いを考え、女性に仮託した意味を考える。知技 主態 →「言語活動」1 ❷ 第三段・第四段を中心にまとめる。思判表 →「学習のポイント」1・2	❶「男の文章と女の文章」も参考にしながら、考えさせる。 ❷ 見送る人々についてどのように考えているか、「願」を立てたことなどを参考にする。

【阿倍仲麻呂】 1　作者の置かれた立場を理解させる。 2　阿倍仲麻呂の心情を理解し、作者の心情と重ねて考えさせる。	導入	❶「阿倍仲麻呂」について調べてきたことを発表する。知技
	展開	❶「阿倍仲麻呂」を音読する。思判表 ❷ 重要古語の意味・用法を確認する。知技 ❸ 現代語訳し、内容を確認する。知技 思判表 ❹ 作者が阿倍仲麻呂を想起した理由を考える。思判表 →「学習のポイント」1 ❺ 阿倍仲麻呂の故事について理解する。知技 思判表 →「学習のポイント」2 ❻「都にて」の和歌に込められた心情を読み味わう。思判表
	まとめと発展	❶「土佐日記」における和歌の役割を考える。知技 主態 →「言語活動」1
【帰京】 1　作者の心情の変遷を捉えさせる。 2　冒頭と末尾が呼応している作品の構成を理解させる。	導入	❶ 帰京した日付を確認し、土佐を出発して二か月弱経過していることに注意する。
	展開	❶「帰京」を音読する。思判表 ❷ 重要古語の意味・用法を確認する。知技 →「言葉と表現」1 ❸ 現代語訳し、作者の心情の変化を中心に内容を確認する。知技 思判表 →「学習のポイント」1 ❹ 二首の和歌を鑑賞する。思判表 →「学習のポイント」2
	まとめと発展	❶ 末尾における作者の心情を考え、その箇所と冒頭部とを読み比べる。主態 →「言語活動」1

	❶「古今和歌集」にも目を配らせる。
	❷ 助動詞の意味や省略について確認させる。 ❹ 船と月の状態を読み取らせ、作者と仲麻呂の共通点を整理させる。 ❺ どうして阿倍仲麻呂の故事が引き合いに出されたのか、作者の心情と合わせて考えさせる。 ❻ 仲麻呂の和歌と読み合わせ、それぞれの心境を比べつつ、読み味わう。
❶ P七四の地図を使用する。	❶ 全文を通して音読する。 ❷ 文の係り受けにも留意させる。 ❸ 作者の心情を表す言葉を抜き出させる。 ❹ 松に関わる古典常識を教え、和歌の理解の助けとする。
	❶ 作品全体の末尾であることに注意させ、冒頭部と読み比べさせる。

【男の文章と女の文章】 1　平安時代における男性と女性の文体や内容の違いを理解させる。 2　なぜ紀貫之が女性仮託による文学作品を著すことになったのかを理解させる。	**導入**	❶作者について理解する。
	展開	❷本文を黙読する。 ❸平安時代の日記について、男性のものと女性のものはどのように異なっていたか。文体と内容の面からまとめさせる。知技 思判表　→**「学習のポイント」1** ❹平安時代の男性の日記について、誰がどのような名前の日記を残しているか、調べさせる。知技 主態　→**「学習のポイント」2**
	まとめと発展	❺「門出」を読み返し、男性の日記と女性の日記のあり方の違いを考え、女性に仮託した意味を考える。知技 思判表
【単元の言語活動５　変体仮名を読む】 1　日本の伝統的な書記法を学び、幅広く古典に対する関心を持たせる。	**展開**	1　変体仮名を読む。知技 主態 ❶「土佐日記」写本（図版1）の□で囲った文字の字母を「仮名字体表」（図版2）を見て特定する。 ❷図版1の□で囲った部分を平仮名に置き換える。知技 主態
	まとめと発展	2　図版1と「門出」本文と比べ、本文中で句読点がつけられている箇所に句読点を加える。知技 主態

	❸本文に書かれていることを丹念に拾って、男女が対照的になるようにまとめさせる。 ❹資料集や図書室の資料などを用いて調べさせる。
	❺女性に仮託するという虚構の方法について理解させる。
	❶「門出」（七四ページ）に活字で本文が載っているので、それを参考にして仮名字体表を探させる。 ❷基本的に一字一音であることを伝え、教科書本文と図版を忠実に比べていくようにする。

土佐日記

作者

紀貫之

「土佐日記」で「ある人」の歌とされている作が「後撰和歌集」には貫之作として採られており、「恵慶法師集」には「つらゆきがとさの日記」とある。「後撰和歌集」は貫之の息子時文が撰者の一人として参加しており、恵慶も時文と交流があったことが確認できる人物であることから、「土佐日記」の作者を紀貫之とする所伝は信じてよい。

▼生没年

未詳。貞観十四（八七二）年前後～天慶八（九四五）年前後。

▼家系・出自

紀氏は武内宿禰の子、紀角宿禰の子孫と称する古代屈指の雄族であったが、貞観八（八六六）年の応天門の変で紀夏井が連座したこともあって、以後は衰えた。武門の伝統を伝える一方で、惟喬親王を囲む文学サロンを在原業平とともに形成した有常、文人貴族の長谷雄、古今和歌集真名序作者の淑望らを輩出するなど、学問・文芸の方面でも活躍した。

貫之の父は望行。六位の卑官であった。母は未詳である。

▼官歴

延喜十七（九一七）年叙爵、加賀介、同十八（九一八）年美濃介、延長八（九三〇）年土佐守など、地方官を歴任し、承平五（九三五）年帰京。天慶三（九四〇）年玄蕃頭、同六（九四三）年従五位上、同八（九四五）年木工権頭。四十代も遅くなっての叙爵、極官が従五位上とは、官人としては恵まれなかったと言える。

▼業績

寛平四（八九二）年頃開催とされる「是貞親王家歌合」「寛平御時后宮歌合」に見える歌が、現在確認できる最も古い貫之歌である。二十代から三十歳頃までにはすでに歌人として認められていたらしい。延喜五（九〇五）年には最初の勅撰和歌集「古今和歌集」の撰者の中心人物として、仮名序を執筆し、和文によって和歌の理論を展開した。入集歌数も第一位で、歌壇の第一人者として、この頃から貴顕の依頼に応じての屏風歌を詠むことが多くなった。それらは「貫之集」に収められている。同七（九〇七）年、宇多上皇の大井川行幸に従い九題九首の和歌と仮名による「大井川行幸和歌序」とを献じ、同十三（九一三）年「亭子院歌合」「内裏菊合」に出詠。延長七（九二九）年に醍醐天皇の勅を受けた「新撰和歌」を土佐在任中に完成（ただし醍醐天皇が崩御したため手元に留めた。）、承平五（九三五）年の帰京以降、「土佐日記」を完成させた。天慶二（九三九）年「紀貫之家歌合」を催した。宇多天皇の主導により和歌が宮廷文芸として復興の兆しを見せる中での登場以来、歌壇の第一人者として、和歌を漢詩と並ぶ公的文芸の位置

に押し上げるとともに、仮名散文による文芸の可能性を切り開いた。勅撰集入集約四百五十首、作歌総数は千首を超える。

出典

▼底本

新日本古典文学大系「土佐日記　蜻蛉日記　紫式部日記　更級日記」（長谷川政春他校注、平成元〔一九九〕年、岩波書店刊）によった。「土佐日記」は長谷川政春校注、東海大学付属図書館蔵（桃園文庫旧蔵）青谿書屋本を底本とし、藤原定家筆本・宮内庁書陵部蔵本・三条西家本・近衛家本によって補訂している。

▼諸本

貫之自筆本は十五世紀末までは確実に存在したが、以後の消息は不明である。それを藤原定家、藤原為家、松木宗綱、三条西実隆の四者が書写したうち、藤原定家書写本、藤原為家書写本が現存している。作者自筆本こそ失われているものの、自筆本からの転写本が二本も現存しているというのは古典文学作品としては類を見ない僥倖であり、これらの本によって作者自筆本の姿がほぼ復原できる。

▼書名

現存写本ではいずれも「土左日記」と書かれている。前記「恵慶法師集」に「とさの日記」とあることから、古くは「の」を入れて読んでいたらしい。書名の意味を、①土佐守の日記とする説と、②土佐からの旅の日記とする説があるが、①説は全編を女性の手になるものとする建前と矛盾するし、②説は土佐からの旅であることが作中に明記されていないことにそぐわない感もある。

▼成立

平安中期、作者が任国土佐から帰京した承平五（九三五）年二月十六日以後まもなく、遅くとも帰京後初めての任官である玄蕃頭就任の天慶三（九四〇）年までに、帰京の旅中のメモなどを頼りに執筆されたと想定される。

▼内容

女性に仮託した作者による旅日記。任期を終えた国司が某年十二月二十一日に任地を離れるべく門出した記事から、翌年二月十六日に帰京するまでの五十五日間にわたる日次の記で、歴史上の事実としては前土佐守紀貫之が承平四（九三四）年から翌年にかけて、任地から帰京した旅にあたる。国司交代の事務引継ぎや送別の際の人々の言動、船旅における悪天候、海賊の悩み、自然の景観、土佐在任中に亡くした女子への哀傷、人情への批判などを述べる中、随所に和歌を盛り込み、歌論的な評言も差し挟む。内容は多岐にわたり、主題や執筆の動機を一つに絞るのは困難であるが、亡児悲傷など、全編に見られる喪失感が、土佐在任中に醍醐天皇、藤原兼輔ら庇護者を次々に失った日記執筆時の貫之の状況と通じる点があることによって注目される。

参考文献

❇ **教師用**

▽**注釈書**

日本古典文学大系「土佐日記　かげろふ日記　和泉式部日記

更級日記」鈴木知太郎　岩波書店　昭三十二
新日本古典文学大系「土佐日記　蜻蛉日記　紫式部日記　更級日記」長谷川政春他　岩波書店　平元
日本古典文学全集「土佐日記　蜻蛉日記」松村誠一　小学館　昭四十八
新編日本古典文学全集「土佐日記　蜻蛉日記」菊地靖彦　小学館　平七
新潮日本古典集成「土佐日記　貫之集」木村正中　新潮社　昭六十三
日本古典評釈全注釈叢書「土佐日記全注釈」萩谷朴　角川書店　昭四十二
「現代語訳対照　土佐日記」村瀬敏夫　旺文社　昭五十六
「土佐日記　全訳注」品川和子　講談社　昭五十八
「土佐日記　訳注と評論」今井卓爾　早稲田大学出版部　昭六十一
日本の文学　古典編「伊勢物語　土佐日記」中田武司　ほるぷ出版　昭六十一
「土佐日記」川瀬一馬　講談社　平元

▽**研究書**

王朝の歌人「紀貫之」藤岡忠美　集英社　昭六十
日本の作家「宮廷歌人　紀貫之」村瀬敏夫　新典社　昭六十二
「古典の批判的処置に関する研究」池田亀鑑　岩波書店　昭十六
「土佐日記総索引」日本大学文理学部国文学研究室編　日本大学人文学研究所　昭四十二
「土佐日記の地理的研究―土佐国篇―」竹村義一　笠間書院　昭五十二
「土佐日記の風土」清水孝之　高知市民図書館　昭六十二

▽**入門書・研究案内**

日本文学研究資料叢書「平安朝日記Ⅰ」日本文学研究資料刊行会編　有精堂　昭四十六
研究資料日本古典文学「日記・紀行文学」大曾根章介・久保田淳他　明治書院　昭五十九
新潮日本古典文学アルバム「伊勢物語・土佐日記」片桐洋一　新潮社　平二
「紫式部の蛇足　貫之の勇み足」萩谷朴　新潮社　平十二

❊**生徒用**

「土佐日記―付現代語訳」（角川ソフィア文庫）三谷栄一　角川書店　昭三十五
「土佐日記」（岩波文庫）鈴木知太郎　岩波書店　昭五十四
「竹取物語・土佐日記」（新明解古典シリーズ）桑原博史　三省堂　平二
「要説　土佐日記」日栄社編集所　日栄社　平十一
「すらすら読める土佐日記」林望　講談社　平十七
「文法全解　土佐日記」（古典解釈シリーズ）丸尾芳男　旺文社　平十七
「土佐日記（全）」（角川ソフィア文庫　ビギナーズ・クラシックス）西山秀人　角川学芸出版　平十九
「紀貫之」（ちくま学芸文庫）大岡信　筑摩書房　平三十

図版解説

〈北野天神縁起絵巻〉

九州国立博物館蔵。南北朝時代（一四世紀）。絵巻。一巻。紙本著色。菅原道真の一生、怨霊となった道真の祟り、天神を信仰するものに与えられる利益、天満宮創建の由来、などから成る。本図は、道真が九州に下って行く海陸の旅路を描く。⇩P73

〈光琳かるた〉

大石天狗堂蔵。江戸時代中期。歌かるた。尾形光琳（一六五―一七一六）筆。琳派を代表する画家・工芸意匠が制作した、鮮明な色彩、巧緻な絵に金を効果的に使用した豪華絢爛な小倉百人一首かるた。⇩P77

〈藤原為家自筆嘉禎二年古写本『土佐日記』〉

大阪青山歴史文学博物館蔵。古写本。国宝。藤原為家（一一九八―一二七五）が嘉禎二（一二三六）年に、蓮華王院にあった紀貫之自筆の土佐日記を一字も違えずに書写したもの。貫之自筆本は現在に伝わらず、原本の姿を最も忠実に伝えている為家自筆本は、学術文献資料としての価値が非常に高い。⇩P84

門出

要旨

男性が書く日記を女性も書いてみようと思い、帰京の旅の顚末を記すことにする。出立にあたって人々は別れを惜しむ。

構成

段落	ページ・行	段意
第一	初め～P七四・3〈するなり。〉	男性が書く日記を女性である私も書いてみる。
第二	P七四・4〈それの年の〉～P七四・7〈書きつく。〉	某年十二月二十一日出立の顚末を日記の内容とする。
第三	P七四・8〈ある人〉～P七五・2〈夜更けぬ。〉	ある国司が任期を終えて、諸手続きを済ませて船に乗るはずの場所へ行く。見送りの人々と別れを惜しんでいるうちに夜が更けてしまった。
第四	P七五・3〈二十二日に〉～P七五・5〈あざれ合へり。〉	二十二日に、和泉の国まで旅の無事を祈る。藤原ときざねが送別の宴を開く。皆酔っぱらってふざけあった。
第五	P七五・6〈二十三日。〉～P七五・9〈しもあらず。〉	二十三日。八木のやすのりが送別の宴を開く。心ある者たちは気兼ねすることなくやって来た。
第六	P七五・10〈二十四日。〉～終わり	二十四日。講師が送別の宴においでになった。みなが酔って、足元がおぼつかなくなった。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については巻末参照。）

①男（をとこ）も　す　なる　日記（にき）　と　いふ　もの　を、　女（をんな）　も

係助・同類　サ変・終　伝・体　格助・引用　八四・体　格助・対象　係助・同類

し　て　み　む　と　て　する　なり。

サ変・用　接助・単接　補動・マ上一・未　意・終　格助・引用　サ変・体　断・終

②それ　の　年（とし）　の　十二月（しはす）　の　二十日（はつか）あまり一日（ひとひ）　の　日（ひ）

代　格助・体修　格助・体修　格助・体修　格助・体修

の　戌（いぬ）　の　刻（とき）　に、　門出（かどで）　す。　③その　よし、　いささかに

格助・体修　格助・体修　格助・時間　サ変・終　代　格助・体修　形動ナリ・用

もの　に　書（か）きつく。

格助・場所　カ下二・終

④ある　人（ひと）、　県（あがた）　の　四年（よとせ）　五年（いつとせ）　果（は）て　て、　例（れい）　の　ことども

連　格助・体修　タ下二・用　接助・単接　格助・体修

みな　し終（を）へ　て、　解由（げゆ）　など　取（と）り　て、　住（す）む　館（たち）　より　出（い）で

副　八下二・用　接助・単接　副助・婉　ラ四・用　接助・単接　マ四・体　格助・起点　ダ下二・用

て、　船（ふね）　に　乗（の）る　べき　所（ところ）　へ　渡（わた）る。　⑤かれ　これ、　知（し）る　知（し）ら

接助・単接　格助・対象　ラ四・終　当・体　格助・方向　ラ四・終　代　代　ラ四・体　ラ四・未

ぬ、　送（おく）り　す。　⑥年（とし）ごろ　よく　くらべ　つる　人々（ひとびと）　なむ、

打・体　サ変・終　形ク・用　バ下二・用　完・体　係助・強意（係）

別（わか）れがたく　思（おも）ひ　て、　日（ひ）　しきりに、　とかく　し　つつ、

形ク・用　八四・用（流れ）　接助・単接　副　副　サ変・用（流れ）　接助・継続

ののしる　うち　に、　夜（よ）　更（ふ）け　ぬ。

ラ四・体（流れ）　格助・時間　カ下二・用　完・終

①男も書くという日記というものを、女（である私）も書いてみようと思って書くのである。

②某年の（陰暦）十二月二十一日の日の午後八時頃に、出発する。③その事の次第を、少しばかり物（紙）に書きつける。

④ある人が、（地方官としての）任国での四、五年（の任期）が終わって、慣例の諸事務を全てし終えて、（新任の国司から事務引継ぎ終了を証明する）解由状などを受け取って、住んでいる官舎から出て、船に乗ることになっている場所へ移る。⑤あの人この人、知っている人知らない人が、見送りをする。⑥長年の間親しく付き合っていた人々は、別れがたく思って、一日中、あれこれとしていて、大騒ぎするうちに、夜が更けてしまった。

⑦二十二日に、和泉の国までは（たどり着かせてほしい）と、無事であるように願をかける。⑧藤原のときざねが、（馬は使わない）船旅であるけれども、馬のはなむけ（送別の宴）をする。⑨身分の高い人も普通の人も低い人も、すっかり酔っぱらって、たいそう不思議なことに、（塩がきいていて「あざる《ものが腐る》」はずのない）海のほとりで、「あざれ（ふざけ）」合っている。

⑩二十三日。⑪八木のやすのりという人がいる。⑫この人は、国府において決して重用された者でもないようである。⑬そんな人物が、立派な様子で、餞別をする。⑭前国守の人柄であろうか、国人の心の常として、「今更（見送りに行っても仕方がない）」と言って現れないものであるが、真心のある者は、憚ることなくやって来た。⑮これは、物をもらったから褒めるわけではない。

⑯二十四日。⑰国分寺の住職が、餞別にお見えになった。⑱上も下も、あ

⑦二十二日に、和泉の国まで と、平らかに 願立つ。 ⑧藤原
格助・時間　副助・範囲　格助・引用　形動ナリ・用　タ下二・終

のときざね、船路 なれ ど、馬のはなむけ す。 ⑨上 中 下、
断・已　接助・逆確　サ変・終

酔ひ飽き て、いと あやしく、潮海 の ほとり にて、あざれ合へ
カ四・用　接助・単接　副　形シク用　格助・体修　格助・場所　八四・已

り。
存・終

⑩二十三日。⑪八木のやすのり と いふ 人 あり。 ⑫この 人、
格助・引用　八四・体　ラ変・終　代　格助・体修

国 に 必ずしも 言ひ 使ふ 者 に も あら ざ
格助・場所　副　八四・用　八四・体　断・用　係助・強意　ラ変・未　打・体（撥音＋無表記）

なり。 ⑬これ ぞ、たたはしき やう にて、馬のはなむけ し たる。
定・終　代　係助・強意（係）　形シク・体　格助・状態　サ変・用　完・体（結）

⑭守柄 に や あら む、国人 の 心 の 常 と
断・用　係助・疑問（係）　補動・ラ変・未　推・体（結）　格助・体修　格助・体修　格助・状態

して、「今 は。」 と て 見え ざ なる を、
サ変・用　接助・単接　係助・区別　格助・引用　接助・単接　ヤ下二・未　打・体（撥音＋無表記）　定・体　接助・逆接

心ある 者 は、恥ぢ ずに なむ 来 ける。 ⑮これ
ラ変・体　係助・区別　ダ上二・未　連語（打・用＋格助・状態）　係助・強意（係）　カ変・用　過・体（結）　代

は、物 に より て 褒むる に しも あら ず。
係助・区別　格助・対象　ラ四・用　接助・単接　マ下二・体　断・用　副助・強意　補動・ラ変・未　打・終

⑯二十四日。⑰講師、馬のはなむけ し に 出でませ り。
係助・区別　格助・対象　ラ四・用　接助・単接　マ下二・体　断・用　副助・強意　補動・ラ変・未　打・終

⑱ありとある　上下、童まで　酔ひしれて、一文字を　踏みて

連語（ラ変・用＋格助・並列＋ラ変・体）　副助・範囲　ラ下二・用　接助・単接　格助・対象　マ四・用　接助・単接

だに　知らぬ　者、しが　足は　十文字に

副助・類推　ラ四・未　打・体　代　係助・区別　格助・状態

ぞ　遊ぶ。

係助・強意（係）　バ四・体（結）

りとあらゆる身分の人々、子供までが酔いしれて、一という文字すら知らない者が、その足を十文字に踏んで遊ぶ。

学習活動のポイント

導入

学習活動のポイント

❶「土佐日記」と作者紀貫之について調べてきたことを発表する。知技(1)ア

❶新しい作品を扱う際には必ず文学史的事項について言及するべきで、ここでも生徒自身に調べさせることが望ましい。教科書の作品紹介が載せる以上の、作品の関連情報を調査させたい。

展開

学習活動のポイント

❶「門出」を音読する。思判表B(1)ア

❷重要古語の意味・用法を確認する。知技(1)ウ・(2)ウ

❸現代語訳し、段落ごとに内容を確認する。思判表B(1)ア

❹作者がどのような立場で書いているか、確認する。思判表B(1)エ

❺諧謔表現を味わう。知技(1)エ　思判表B(1)イ

→「言葉と表現」1

❶有名作品の冒頭部分は暗唱させるとよい。「土佐日記」の冒頭詳細である必要はなく、同ジャンルに属する他作品として何があるか、それらとの先後関係はどうなっているか、程度でよい。紀貫之は最初の勅撰和歌集「古今和歌集」の撰者であり、仮名序の執筆者であったことが重要である。歌人であると同時に仮名散文の創始者でもあったという、日本語日本文学史上に占める重要な位置を理解させたい。

【評価】言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解しているか、確認する。

部分は助動詞「なり」の識別の目安ともなり、非常に有益である。また、「酔ひ」など、現代と著しく発音の異なる語には特に注意させる。「かれこれ、知る知らぬ」の対照法の部分はリズムに注意して読ませる。

【評価】文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、音読により、確認する。

❷重要古語に関しては、接続や意味の違いに着目して紛らわしい語の識別ができるように指導する。また、十二支、月の異名など古典常識に関わる語に関しては、断片的、その場限りの知識でなく、体系的、網羅的に教えることが必要である。助動詞の「べし」は意味が多いので注意したい。「知る知らぬ」が準体法、

「なむ」の結びが流れている点など、確実に理解させたい。

【評価】我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしているか、ペーパーテストにより、確認する。

・古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解しているか、ペーパーテストにより、確認する。

❸現代語訳は逐語訳を基本に正確な理解を徹底させたい。あいまいで感覚的な訳をしていては正確な読解力は身につかない。

【評価】文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、授業中に指名し、部分の現代語訳や品詞分解を行わせることにより、確認する。

❹導入の調査と関連させて、作者が女性を筆者に仕立てるという虚構を採用していることを理解させる。教科書の脚注を参照して、作者自身を「ある人」と第三者的に扱っていることを、冒頭の女性仮託とも関連づけながら理解させる。

【評価】男性の作者があえて女性に仮託して日記を書こうとした意図について、作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めているか、発表などにより、確認する。

❺諧謔表現は、言葉の多義性を利用して意外性とおもしろみを生み出していることを理解させる。

【評価】文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解しているか、確認する。

・諧謔表現について、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈しているか、口頭で説明させて、確認する。

《板書例》諧謔表現

陸路　馬のはなむけ（送別の宴）　⇔　海路　船旅　　矛盾＝諧謔

上中下―あざる（ふざける）　＝　あざる（腐る）　⇔　潮海（塩気は腐敗を防ぐ）　　掛詞＝諧謔　矛盾＝諧謔

一文字　をだに　知らぬ　者　⇔　しが足は　十文字　に　踏みて　遊ぶ　　矛盾＝諧謔

まとめと発展

学習活動のポイント

❶ 男性の日記と女性の日記のあり方の違いを考え、女性に仮託した意味を考える。知技⑵エオ　主態　→「言語活動」1

❷ 第三段・第四段を中心にまとめる。思判表B⑴　→「学習のポイント」1・2

❶「男の文章と女の文章」も参考にしながら、考えさせる。「男もすなる日記」がどういう特徴をもつものであったかを教えて、それとの対比で女性の日記がもちうる特徴を考えさせたい。日記に限らず、当時の一般として、男性は漢文、女性は仮名文という通念があったことや「女手」などの言葉の紹介を絡めたりしながら、理解させたい。男性漢文日記と女性仮名日記の特徴の違いを調べさせて、発表させたり、レポートなどにまとめさせてもよい。

【評価】時間の経過による文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解しているか、確認する。

・歴史的な文体の変化について、日記文学が、日記文学が単なる事実の記録にとどまらず、作者の思想や人々の心情を掘り下げることのできる文学形態であることに理解を深めているか、確認する。

・進んで日記文学の特徴や成立の背景を理解し、諧謔などの表現の工夫を味わい、学習課題に沿って女性に仮託した作者が日記でどのようなことを書こうとしたのか「男の文章と女の文章」を参考にして話し合おうとしているか、分析する。

❷地図を参照して海路の危険を理解させる。当時の国制を話して和泉の国が安全な畿内であることを理解させる。

❷見送る人々についてどのように考えているか、「願」を立てたことなどを参考にし、登場人物の心情を表す言葉を抜き出させ、整理させたうえで、意見交換をさせる。

【評価】出立にあたっての人々や作者の心情が読み取れているか、ペーパーテストにより、確認する。

発問例

●七四ページ

問　**「すなる」（2行目）と「するなり」（3行目）には、どのような違いがあるか。**

答　「すなる」は「するという、すると聞いている」の意で、「なる」は伝聞の助動詞・連体形。「するなり」は「するのである」の意で、「なり」は断定の助動詞・終止形。

補　品詞分解して文法的に説明できるようにする。「なり」の識別は重要。形容動詞の語尾や四段動詞「なる」と共にここで説明する。

問　**「男もすなる日記」（2行目）とはどのようなものか。**

答　公家日記。漢文で書かれた事実の記録。

問　**「女もしてみむ」（3行目）を現代語訳せよ。**

答　女（である私）も書いてみよう。

問　**「十二月（しはす）」（4行目）のような月の異名を一月から十二月まで言いなさい。**

答

一月	睦月（むつき）	七月	文月（ふみづき・ふづき）
二月	如月（きさらぎ）	八月	葉月（はづき）
三月	弥生（やよひ）	九月	長月（ながつき）
四月	卯月（うづき）	十月	神無月（かんなづき）
五月	皐月（さつき）	十一月	霜月（しもつき）

語句の研究

●七四ページ

2男もすなる　「男も書くという」。「も」を列挙とする解釈もあるが、萩谷朴氏によると、ここは「僕も行くから君も行け」の「僕も」の「も」のように、下の「女も」を誘い出すための強意の係助詞で、「女も」の「も」は列挙の係助詞。「なる」は伝聞の助動詞で終止形接続。男が日記を書くことを伝聞の形で述べているのは、筆者を女性に仮託しているため。

2日記　促音便無表記で「にき」とも表記された。平安時代には諸官庁の公務などを記録した公日記、儀式や行動を記録した私日記もあったが、いずれも男性が変体漢文で記したものが一般的だった。例えば、平安時代中期、右大臣であった藤原師輔（ふじわらのもろすけ）の日記「九暦（きゅうれき）」は、天暦元（九四七）年十一月について次のように記されている。「十八日、節会事、有子細、卅日、弓場始、主上先射給当的事」。女性のものとしては歌合の次第を書いた和文の歌合日記が数例残されているが、これとても記録としての性格が強い。

3女もしてみむとて　「女の私も書いてみようと思って」。「みる」は接続助詞「て」を伴って「試しに…する」の意を添える補助動詞。筆者を女性に仮託している。一般的には、仮名文字で書くための「女性仮託」と言われているが、勅撰集である「古今和歌集」の序文を仮名で書くという大胆なことをやってのけた貫之が、私的な日記を仮名で書くことにためらいがあったとは思えない。それよりは次のような効果を狙ったと思われる。①男性官人としての立場から自由になり、私的個人的立場から自由に執筆できる。②出来事の無味乾燥な記録とは異なり、人々の人情の動きに焦点を当てることができる。特に、亡くなった女の子への哀惜の念など悲嘆的感傷的な内容を、当事者として深く掘り下げることができる。③作者のそばにいた女性の立場を取ることで、貫之自身を第三者的に突き放して書くことができるようになる。④漢文ではなく和文を用いることができるため、作中に和歌をふんだんに取り込むことができる。さらに、地の文にも、和歌的技巧を持ち込むことができる。これらの効果に加え、作者が持っている漢文的な文章力、すなわち、対句的、対照的な構成法も加味されて、仮

六月	水無月	十二月	師走

問 **戌（5行目）とあるが、十二支を全て答えなさい。**

答 子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥。

問 **「そのよし」（6行目）の指す具体的な内容を答えよ。**

答 ある年の十二月に、ある人（作者）が京へ旅立つその旅全体の様子。

問 **「もの」（6行目）とは、具体的に何のことか。**

答 紙

問 ◉**「ある人」（8行目）とは、誰か。**

答 作者（紀貫之）のこと。

補 作者（紀貫之）は女性に仮託してこの文章を書いているので、自分のことではあるが、「ある人」と第三者的に表現している。「ある人」は国守とあり、貫之だと分かる。

問 **「乗るべき所」（11行目）とは、どのような意味か。**

答 「乗るはずの所、乗ることになっている所」など。「べき」は当然の助動詞。

問 **「かれこれ」「知る知らぬ」（七四・11～七五・1行目）は、それぞれどのような意味で、どのような対照になっているか。**

答 「かれこれ」は、「あの人この人」の意で遠名文のいっそうの発達が促されたと言われる。

3するなり　「書くのである」。「なり」は連体形接続のため断定の助動詞。ここまでの冒頭の一文が日記最末尾の「とまれかうまれ、疾く破りてむ。」と対応する。冒頭は、女性を装って日記を書く試みを宣言している文であるが、男性のような日記を書くつもりは当初よりなかったと考えられる。同様に末文は、「疾く破りてむ」とあるが、もとより作者にそのような気持ちはなかった。これも冒頭と同様偽装の言葉であり、新しい「日記文学」の誕生を裏返して述べた言葉であると考えられる。つまり、冒頭で試みの言葉を述べ、末尾でその成功を述べているという対応関係にあると言える。

4それの年　「ある年、某年」。貫之が任国土佐を出発したのは承平四（九三四）年だが、ぼかして言った。

5戌の刻　午後八時頃。一日二十四時間を十二等分し、午前零時から順に子、丑、寅…と十二支を当てて時刻の目安とした。「戌の刻」は午後七時頃から九時頃の二時間とも、午後八時からの二時間ともいう。後の「ののしるうちに、夜更けぬ」に対応。

5門出　「かどいで」からの変化。「出発」の意もあるが、ここは吉日に、あるいはよい方角に向けて出立するため、実際の旅立ちの前に場所を移ること。貫之の実際の出発は二十七日で、それまで送別の宴に明け暮れていた。

6そのよし　「そ」の指示内容を広く「京への旅全体」とも、限定した「門出」とも取れるが、この一文が日記末尾の「忘れがたく、口惜しきこと多かれど、え尽くさず。」と対応していると考えて、前者と見る。「よし」は「様子、事の次第」の意。

6もの　「紙」をぼかした表現。

8ある人　貫之自身を第三者的にぼかした表現。筆者に仮託されたのは貫之の身近にいた女性という設定。その女性の視点から貫之自身について述べている。

8県の四年五年　「県」は、ここでは地方官の任国。地方官の任期は通常四年で、貫之は延長八（九三〇）年正月に任命され、同年秋に現地に赴任しているので、このときまでに足掛け五年が経過している。後任の国守の着任が遅れたためである。よって、待ちかねた、ようやくの帰京であった。

9例のことども　国司交替の際に行われる恒

近の対照。「知る知らぬ」は、「知っている人知らない人」の意で親疎の対照。

●七五ページ

問 **◉「人々なむ」（1行目）の「なむ」の結びはどうなっているか。**

答 「思ひて」「しつつ」「ののしる」などの語に掛かっていき、そこで文が終止せず先へ続いているために、結びの流れが起こっている。

補 文末の「更けぬ」とは係り受けの関係になっていないことを確認させる。

問 **「ののしる」（2行目）とは、どのような意味か。**

答 大騒ぎする。

問 **「更けぬ」（2行目）を文法的に説明し、現代語訳しなさい。**

答 カ行下二段動詞「更く」の連用形＋完了の助動詞「ぬ」の終止形。更けてしまった。

補 「なむ」を受けてはいないので、〈未然形＋打消の助動詞「ず」の連体形〉ではない。

問 **「船路なれど、馬のはなむけす。」（3〜4行目）という言い方のおかしさ（洒落・ユーモア）を説明せよ。**

答 馬に乗らない船旅であるのに、旅立つ目的地の方向に馬の鼻を向けて、旅人の無事を祈願する古代の風習である「馬のはなむけ」を言い立て、わざと言葉の上での矛盾

例の事務引き継ぎのこと。

9解由 解由状。奈良・平安時代に、官人の交替の際、後任者が前任者との交替事務の完了を認めて交付する文書。前任者は一定期日内にこれを太政官に提出しなければならず、これがなければ次の官職につくことができなかった重要書類。

10住む館 国司の官舎。現在の高知県南国市比江にあった。

11船に乗るべき所 高知市大津。当時は古浦戸湾に面した良港だったが、現在は陸地になっている。十二月二十七日条に「大津より浦戸を指して漕ぎ出づ。」とある。「べき」は当然の助動詞。

11渡る ある地点（時点）から他へ移動することで、ここは「行く、移る」の意。

11かれこれ 漢語「彼此」の訳語と言われる。ここは「あの人この人、誰彼」の意。

●七五ページ

1知る知らぬ 「知る」「知らぬ」は共に準体言で、下に「人」などを補って解釈する。次の「送りす」の主語。

1年ごろ 「年来、数年の間」の意で、ここは貫之の土佐国守在任期間を指す。同類の表現に「月ごろ」「日ごろ」がある。

1くらべつる 「くらぶ」は「親しく付き合う」の意。「源氏物語」に、「付き合いにくい」の意と解される「くらべぐるし」の語がある。

1人々なむ 主語として後の「思ふ」「す」「ののしる」に掛かるが、いずれも、そこで文が終止しないために係り結びが行われず、結びの流れが起こっている。

1別れがたく 「がたし」は「かたし」が動詞の連用形について、濁音化した接尾語。「…しにくい、なかなか…ない」の意。

2日しきりに 一日中。

2とかく 「あれこれ」の意の副詞。副詞「と」＋副詞「かく」で一語化したもの。

2ののしる 「大騒ぎする」。現代語との語義の違いに注意。

3二十二日 写本の原表記が漢字表記であることを考慮して音読みしておくが、「はつかあまりふつか」と和訓で読むことも可能。

3和泉の国までと、平らかに 「和泉の国」は現在の大阪府南部。「まで」の後に「たどり着かせてほしい」などを補って解釈する。「と」は引用の格助詞。「平らかに」は「（旅が）平穏無事であるように」とする説と「心穏やかに」とする説がある。前者な

をおもしろがっている。

問　**「上中下」（4行目）とは、どのような意味か。**

答　身分の高い人・普通の人・低い人の意。

問　**「いとあやしく、潮海のほとりにて、あざれ合へり。」（3〜4行目）には二通りの解釈が考えられる。それぞれを説明せよ。**

答　①まことに見苦しく、海のほとりで酔っぱらってふざけ合っている。②まことに不思議なことに、塩のきいた海のほとりで、腐るはずがないのに腐っている。

問　**「平らかに願立つ。」（3行目）とあるが、作者はどのようなことを心配していたと思われるか。**

答　海賊の横行や風雨、波浪が強く、海が荒れること。航海の安全を祈願しているのである。

問　**「潮海のほとりにて、あざれ合へり。」（4行目）の表現上のおもしろさを説明せよ。**

答　「あざる」は「ふざける」と「（魚肉などが）腐る」の二通りの意味がある。和歌の技法である掛詞と同様の考え方で、人々が「海辺でふざけている」さまを、「腐るはずのない所で腐っている」と言い立て、「潮海」と「あざる（腐る）」の言葉の上での矛盾を楽しんでいる。

問　◉**「守柄にやあらむ」（7行目）は、どこ**らば、通常の語順としては「和泉の国まで平らかにと」とあるべきところを、風浪や海賊の危険がなくなる内海の畿内国である和泉の国まで来れば一安心という意識から、和泉の国を強調的に先に取り上げたことになる。一月三十日条に「今は和泉の国に来ぬれば、海賊ものならず。」とあるのに対応しているとして前者を採った。

3願立つ　神仏に願をかける。ここの「立つ」は他動詞で、タ行下二段動詞。

3藤原のときざね　未詳。呼び捨てにされているところから、身分の低い人物で、貫之の土佐国府での下僚かと言われる。

3船路なれど、馬のはなむけす　「馬のはなむけ」は元来、旅立ちにあたり乗馬の鼻を行く方向へ向けて無事を祈る習俗で、後には送別のもてなしやその品を意味するようになった。ここも後者の意だが、馬に乗らない船旅なのに「馬のはなむけ」をするという矛盾を楽しむ諧謔表現になっている。

4上中下　「身分の高い人も普通の人も低い人も」の意で、結局「そこにいる全ての人」の意となる。

4酔ひ飽きて　「飽く」は、ここでは「満足する、すっかり…する」の意。

4あやしく　「不思議なことに」。次の「潮海の…あざれ合へり。」の形容。塩のきいた海と「あざる（腐る）」の矛盾を不思議がる表現。酔っぱらった様子の「見苦しく」の意をも表すとする説もある。

4潮海のほとりにて、あざれ合へり　「あざる」には「ふざける」「腐る」の両義がある。ここは「酔っぱらってふざける」の意に「腐る」の意を掛けて、塩のきいた海のほとりなのに腐っている、と矛盾を楽しむ諧謔表現。歌人としての作者の言葉に対する感性が生かされた文章となっている。

4　「合ふ」は「（複数の人が）一緒に…する」の意を添える補助動詞。

6八木のやすのり　伝未詳。土佐の豪族か。

6国　国司の役所。国府。「竹取物語」に「国に告げたれども、国の司まうでとぶらふにも」という例がある。

7ざなり　「ざるなり」の撥音便「ざんなり」の「ん」を表記しない形。

7守柄　国守の人柄。ここでは前国守の作者自身について言う。

10講師　国分寺の住職。国内の僧尼を管掌し、仏の教えを講じる。

10出でませり　おいでになった。「出でます」

に掛かっているか。

答 「来ける」

補 挿入句である。「来ける」の連用修飾句となっている。

問 「今は。」（8行目）の下に省略されているのは、どのようなことか。

答 もう用はない。

補 都へ帰っていく役人に対する土地の人の態度である。

問 「一文字をだに知らぬ者、しが足は十文字に踏みてぞ遊ぶ。」（11行目）はどのようなところがおもしろいのか。

答 「一」の文字さえも読めない者たちが、酔っぱらって足元がおぼつかず、足で「一」より難しい「十」の文字を書いているように見えるところ。

は動詞「出づ」に尊敬の補助動詞「ます」が付いて一語化したもの。

11 一文字をだに知らぬ　一という文字すら知らないとする誇張表現。「紫式部日記」にも、「一といふ文字をだに書きわたしはべらず」という卑下表現が見られる。

11 しが足は　その足は。「し」は代名詞、「が」は格助詞。

鑑賞

いわゆる女性仮託の宣言といわれる冒頭の一文を含む一節である。第三者の女性を筆者に擬しているわけだが、作者とは別人格の女性を立ててその視点から記述するというやり方が作中に一貫して採用されているとは必ずしも言えない。「男もすなる日記」が記録性の強い日次（ひなみ）の漢文日記を指すとすれば、それを「女もしてみむとてするなり」という文言は、表面的には男性漢文日記の女性版を作ろうという意味であり、すなわち、女性仮託の主眼は、仮名文による日々の記録を記そうとするところにあったということになりそうである。この作品は任国土佐からの帰京の旅を記したものであるが、その五十五日間が一日も欠かされることなく記されているところに、その記録性は如実に現れている。この序言が作品末尾の「とまれかうまれ、疾く破りてむ。」と呼応していることは一目瞭然であり、そこではせっかく書いた日記を破棄しようと述べられている。これは、記録を目指して書かれたはずなのに、思いがけずも亡児悲傷をはじめとする人情の掘り下げが行われたり、歌論めいた表現が随所に挟み込まれたりと、客観的な記録性を逸脱したことに対する自己批判の文言であると言えよう。

しかし、もちろんこの跋文を正直に受け取ることはできない。作品は破棄されることなく、転写を経て現存しているからである。つまりこれは韜晦の言辞であるが、記録性を脱した仮名文学作品を作り出したことを逆説的に揚言していることになる。とすれば、冒頭の「男もすなる日記」を「してみむ」という文言も、実は初めから裏切られるために書き付けられたポーズのようなものであったと言えよう。記録の体裁をとり、それを目指すと言いながら、なし崩し的に逸脱していくのが「土佐日記」の執筆態度であった。

作者紀貫之は「古今和歌集」の撰者として、歌壇の指導的地位にあった人物である。いわゆる古今調の特徴の一つとして、理知的、言葉遊びによる技巧性などが指摘されるが、言葉遊びに基づく諧謔表現が随所にちりばめられていることは、この作者の作品としてまことに似つかわしいことであると言える。

《板書例》 諧謔表現

陸路　馬のはなむけ（送別の宴）
⇔
海路　船旅
　　矛盾＝諧謔

上中下―あざる（ふざける）
＝
あざる（腐る）
⇔
潮海（塩気は腐敗を防ぐ）
　　掛詞＝諧謔
　　矛盾＝諧謔

一文字　をだに　知らぬ　者
⇔
しが足は　十文字　に　踏みて　遊ぶ
　　矛盾＝諧謔

深い学びのために

学習のポイントの解答例

1 **「和泉の国までと、平らかに願立つ。」（七五・3）とあるが、『土佐日記』旅程図も参考にしながら、「和泉の国まで」としているのはなぜか、考えてみよう。**

【答】 和泉国は畿内に分類され、治安も安定していた。また、その先からは内陸の河川を通る道筋となり、転覆や海賊等の危険が少なくなるから。

▼ポイント▲ 口絵の「旧国名・都道府県名対照図」を見ると、和泉は都と同じ「畿内」の範疇に入っていることが分かる。また、「旅程図」を見ると、和泉の先の摂津からは河川に入っていったことが分かる。外洋と河川の違いを考えてまとめるとよい。

2 **「八木のやすのりといふ人あり。」（七五・6）とあるが、作者は「八木のやすのり」をどのように評価しているか、「国人」と対比して、まとめてみよう。**

【答】 特に召し使っていた者でもないのに、盛大な送別をしてくれたのは、真心を持った者だと評している。ふつうは「国人」に代表されるように、都に帰ってしまって関わりのなくなる人にそこまでのことはしないものである。

▼ポイント▲ 「二十三日」の項目に書いてあることをまとめる。「国人」は「心ある者」と対比されており、「八木のやすのり」は「心ある者」と考えられていることを読みとってまとめる。

言葉と表現の解答例

1 **次のそれぞれの表現のおもしろさについて、考えてみよう。**

(1) **船路なれど、馬のはなむけす。（七五・3～4）**

(2) **潮海のほとりにて、あざれ合へり。（七五・4～5）**

(3) **一文字をだに知らぬ者、しが足は十文字に踏みてぞ遊ぶ。（七五・11）**

【答】 (1) 「馬のはなむけ」は「送別の宴」という意。しかし語源的には、旅立ちにあたって行く先の方角へ乗馬の鼻先を向けてやる習俗に基づく。ここはその語源的意味を生かして、馬には乗らない船旅と「馬のはなむけ」という言葉との間に矛盾を感じ取り、そこにおかしみを見出している。

(2) 「あざる」には「(魚などが)腐る」意と「ふざける」意とがある。ここは船に乗るべき海のほとりの送別の宴で、皆が酔っぱらってふざけあっている、という意味であるが、「あざる」に「腐る」の意もあるので、「潮海」の塩気(腐敗を防ぐ)と「あざれ」の腐敗とに矛盾を見出し、おもしろがっているのである。

(3) 「一」という漢字を知らない無教養な者が、酔っ払って、足

の動きが「十」という漢字になっているところ。

▼ポイント▲「船」と「馬」、「一」と「十」などの矛盾した言い方によるおもしろさと「あざる」という語を二つの意味に取ることによるおもしろさとがある。例に応じて説明する。

言語活動の解答例

1　**「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり。」（七四・2〜3）とあるが、作者は女性に仮託することによって、どのようなことをこの日記に書こうとしたのか、「男の文章と女の文章」（八一〜八二ページ）を参考に、話し合ってみよう。**

【答】（意図）『土佐日記』の仮構性がその表記や内容と関わることを考えることで、当時の文学作品の成立について理解を深めることができる。

（手順）

1　「男の文章と女の文章」の中から男の文章と女の文章との違いについて読み取る。内容としては、男の文章は「世の中のこと」や「政界メモ」であり、女の文章は「自分のこと」を書いている。表記についても確認しておくと、男の文章は漢文によるもので、女の文章はひらがなによるものである。

2　「門出」の内容を考え合わせて、女性に仮託した意味を考える。日時とそれに続く部分には比較的公的だと考えられることが書かれているが、二十一日、二十二日の送別の宴の話、二十三日の八木のやすのりの話などは「自分のこと」と考えられる。作者はこの日記に「世の中のこと」にとどまらない、私的なことも書いてみようと考えて、女性仮託を行ったと考えられる。従来の日記とはまったく別の形のものを創作しようと考えていた。

（ゴール）橋本治氏の文章を参考にしながら、『土佐日記』以前の日記がどのようなものであったかをまとめ、「門出」の内容とを考え合わせて、作者の創作の狙いをまとめる。何人かのグループで意見を交換しながら、まとめていけるとよい。

▼ポイント▲「「男の文章と女の文章」を参考に、」とあるから、男性と女性の違いをそこから読み取ることが大切である。内容と使用文字の二点から押さえることができる。それを踏まえたうえで、作者の意図を考えることになる。

（畠山　俊）

阿倍仲麻呂

要旨

海から昇る二十日の月を見て、その昔の阿倍仲麻呂の故事を思い出す。阿倍仲麻呂が唐で別れに臨んで詠んだ歌を、唐土の人も聞いて感じ入ったそうだが、同じ月の光による感情には変わりがないのであろう。

構成

段落	ページ・行	段意
第一	初め～P七七・2〈出ださず。〉	十九日。天候が悪く、船を出さない。
第二	P七七・3〈二十日。〉～P七七・5〈寝も寝ず。〉	二十日。昨日同様、船を出さない。人々は過ぎる日々を数え、嘆き、寝られない。
第三	P七七・6〈二十日の〉～終わり	二十日の月が海から上がるのを見て、阿倍仲麻呂の故事を思い出す。阿倍仲麻呂は唐土から帰れなかった時に日本では和歌を詠むと言って、和歌を詠んだ。それに唐の人も感動したことを思い出して、歌を詠んだ。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については巻末参照。）

①十九日（名）。②日（名）悪しけれ（形シク・已）ば（接助・順理）、船（名）出ださ（サ四・未）ず（打消・終）。

③二十日（名）。④昨日（名）の（格助・体修）やうなれ（比・已）ば（接助・順理）、船（名）出ださ（サ四・未）ず（打消・終）。⑤みな人々（名）、憂へ（ハ下二・用）嘆く（カ四・終）。⑥苦しく（形シク・用）心（名）もとなけれ（形ク・已）ば（接助・順理）、ただ（副）日（名）の（格助・主格）経（ハ下二・用）ぬる（完・体）数（名）を（格助・対象）、今日幾日（名）、二十日（名）、三十日（名）と（格助・引用）数ふれ（ハ下二・已）ば（接助・順理）、指（名）も（係助・同類）損なは（ハ四・未）れ（受・用）ぬ（強・終）べし（推・終）。⑦いと（副）わびし（形シク・終）。⑧夜（名）は（係助・区別）寝（ナ下二・未）も（係助・強意）ず（打消・終）。

⑨二十日（名）の（格助・体修）夜（名）の（格助・体修）月（名）出で（ダ下二・用）に（完・用）けり（詠・終）。⑩山（名）の（格助・体修）端（名）も（係助・強調）なく（形ク・用）て（接助・単接）、海（名）の（格助・体修）中（名）より（格助・起点）ぞ（係助・強調（係））出で来る（カ変・体（結））。⑪かうやうなる（形動ナリ・体）を（格助・対象）見（マ上一・用）て（接助・単接）や（係助・疑問（係））、昔（名）、阿倍仲麻呂（名）と（格助・引用）言ひ（ハ四・用）ける（過・体）人（名）は（係助・提示）、唐土（名）に（格助・帰着）渡り（ラ四・用）て（接助・単接）、帰り来（カ変・用）ける（過・体）とき（名）に（格助・時間）、船（名）に（格助・対象）乗る（ラ四・終）べき（当・体）所（名）にて（格助・場所）、かの（代）国人（名）、馬のはなむけ（名）し（サ変・用）、別れ（名）

①十九日。②天気が悪いので、船を出さない。

③二十日。④（天気が）昨日と同じようであるので、船を出さない。⑤皆々は、心配し嘆いている。⑥辛く不安なので、ただ、日が過ぎる数を、今日で何日、二十日、三十日と数えると、（数が多すぎて）指を痛めてしまうに違いない。⑦実に悲しい。⑧夜は眠れもしない。

⑨二十日の夜の月が出たことだ。⑩（ここは都と違い）山の端もなくて、（なんと）海の中から出て来るのだった。⑪このような月を見てのことだろうか、昔、阿倍の仲麻呂といった人は、唐土へ渡って、（日本に）帰って来（ようとし）た時に、船に乗るはずの所で、あちらの国の人が、送別会をして、別れを惜しんで、あちらの漢詩を作りなどしたということだ。

惜しみ／て、／かしこ／の／漢詩作り／など／し／ける。／⑫飽か／ず／
マ四・用／接助・単接／代／格助・体修／副助・例示／サ変・用／過・体(結)／カ四・未／打・用

や／あり／けむ、／二十日／の／夜／の／月／出づる／まで／
係助・疑問(係)／補動・ラ変・用／過推・体(結)／格助・体修／格助・体修／格助・体修／ダ下二・体／格助・範囲

ぞ／あり／ける。／⑬その／月／は／海／より／ぞ／
係助・強調(係)／ラ変・用／過・体(結)／代／格助・体修／係助・区別／格助・起点／係助・強調(係)／

仲麻呂／の／主、／「我／が／国／に、／かかる／歌／を／
格助・体修／代／ダ下二・用／係助・同趣／格助・起点／格助・体修／格助・場所／連／格助・対象／

見／て／ぞ、／なむ、／神代／より／神／も／
マ上一・用／接助・単接／係助・強調(係)／係助・強調(係)／格助・起点／係助・同趣／

出で／ける。／⑭これ／を／
ダ下二・用／過・体／代／格助・対象／

詠ん／給び、／今／は／上／中／下／の／人／も、／
格助・体修／マ四・用(撥音)／補動・バ四・用(尊)仲麻呂→神／係助・区別／格助・体修／

かうやうに／別れ／惜しみ／、／喜び／も／あり、／悲しび／も／ある／とき／に／
形動ナリ・用／マ四・用／係助・列挙／ラ変・用／係助・列挙／ラ変・体／格助・時間

は／詠む。」／と／て、／詠め／り／ける／歌、／
係助・区別／マ四・体・(結)／格助・引用／マ四・已／完・用／過・体(流れ)／

青海原／振りさけ／見れ／ば／春日／なる／三笠の山／に／出で／し／
マ上一・已／接助・確偶／在・体／格助・場所／ダ下二・用／過・体

月／かも／
終助・詠嘆

と／ぞ／詠め／り／ける。／⑮かの／国人、／聞き知る／まじく／
格助・引用／係助・強調(係)／マ四・已／完・用／過・体(結)／代／格助・体修／ラ四・終／打推・用／

思ほえ／たれ／ども、／言／の／心／を、／男文字／に／さま／を／
ヤ下二・用／完・已／接助・逆確／格助・体修／格助・対象／格助・手段／格助・対象／

⑫（それでもなごりが尽きず）満足できない（ように思った）のだろうか、二十日の夜の月が出るまで（そこにとどまって）いたのだそうだ。

⑬その月は（やはり）海から出たという。

⑭これを見て、仲麻呂殿は、「私の国ではこのような歌を、神代から神様もお詠みになり、今では（身分の）上中下の（どんな）人でも、このように別れを惜しんだり、喜び事があったり、悲しみがあったりする時には詠むのだ」といって、詠んだという歌は、

青海原……（青々とした大海原のはるかかなたの空を見渡すと、
《ちょうど今上ってきたあの月は》春日にある三笠山の上に出た月《と同じ月》なのだなあ）

と詠んだのだそうだ。

⑮あちらの国の人は、（この歌を）聞いても（言葉が違うので）分かるまいと思われたけれども、歌の意味を、漢字で概略を書き出して、こちら（日

書き出だし／て、／ここ／の／言葉／伝へ／たる／人／に／
サ四・用／接助・単接／代／格助・体修／ハ下二・用／完・体／格助・対象

言ひ知らせ／けれ／ば、／心／を／や／聞き得／たり／けむ、／いと／
サ下二・用／過・已／接助・順偶／格助・対象／係助・疑問(係)／ア下二・用／完・用／過推・体(結)／副

思ひのほかに／なむ／賞で／ける。／⑯唐土／と／こ／の／国／と／
形動ナリ・用／係助・強調(係)／ダ下二・用／過・体(結)／格助・比基／代／格助・体修／格助・比基

は、／言／異なる／もの／なれ／ど、／月／の／影／は／同じ／こと／
係助・区別／形動ナリ・体／断・已／接助・逆確／格助・体修／係助・区別／形シク・終

なる／べけれ／ば、／人／の／心／も／同じ／こと／に／や／
断・体／当・已／接助・順理／格助・体修／係助・同趣／形シク・体／断・用／係助・疑問(係)

あら／む。
補動・ラ変・未／推・体(結)

⑰さて、／今、／そのかみ／を／思ひやり／て、／ある／人／の／詠め／
接／格助・対象／ラ四・用／接助・単接／連／格助・主格／マ四・已

る／歌、／
完・体

都／にて／山／の／端／に／見／し／月／なれ／ど／波／より／
格助・場所／マ上一・用／過・体／断・已／接助・逆確／格助・起点

出で／て／波／に／こそ／入れ／
ダ下二・用／接助・単接／格助・帰着／係助・強意(係)／ラ四・已(結)

本）の言葉を習得している人に話して聞かせたところ、意味を理解（することが）できたのだろうか、まったく意外なほど（感心して）誉めたということだった。⑯唐土とこの（我が）国とは、言葉は違うものなのだが、月の光は同じであるはずだから、人の感情も同じことなのであろうか。

⑰さて、今、当時を想像して、ある人が詠んだ歌、

都にて……（都で山の端に見た月であるが、《海上の今は》波から出てまた波に入ってゆくことよ）

学習活動のポイント

導入

学習活動のポイント

❶「阿倍仲麻呂」について調べてきたことを発表する。［知技(1)ア］

❶「古今和歌集」の本文に当たらせる。

【評価】言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解しているか、確認する。

展開

学習活動のポイント

❶「阿倍仲麻呂」を音読する。［思判表B(1)ア］

❷重要古語の意味・用法を確認する。［知技(1)ウ・(2)ウ］

↓**「言葉と表現」1**

❸現代語訳し、内容を確認する。［知技(1)エ］［思判表B(1)ア］

❹作者が阿倍仲麻呂を想起した理由を考える。［思判表B(1)イ］

↓**「学習のポイント」1・2**

❺阿倍仲麻呂の故事について理解する。［知技(2)ア］［思判表B(1)ア］

↓**「学習のポイント」3**

❻「都にて」の和歌に込められた心情を読み味わう。［思判表B(1)エ］

❶区切りを意識し、聞き手にわかりやすい音読を心掛けさせる。

【評価】「読むこと」において、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、音読により、確認する。

❷係り結びに留意する。また、「べし」や「けむ」などの助動詞を文脈に即して解釈させる。

【評価】我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしているか、ペーパーテストにより、確認する。

・古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解しているか、ペーパーテストにより、確認する。

❸現代語訳は逐語訳を基本に正確な理解を徹底させたい。あいまいで感覚的な訳をしていては正確な読解力は身につかない。

❹「月」がポイントになるが、どのような「月」かを、前後の状況と合わせて考えさせる。

【評価】 作者が阿倍仲麻呂を想起した理由について、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈しているか、確認する。

❺阿倍仲麻呂が置かれた状況、唐人との交流などを本文に即してまとめさせる。

【評価】 我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解しているか、確認する。

・阿倍仲麻呂の故事について叙述を基に的確に捉えているか、ペーパーテストにより、確認する。

❻二首の歌に込められた心情を比べながら考えさせる。描かれた景物との関わりにも留意する。

【評価】 二首の和歌に込められた心情について、作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めているか、意見交換をさせ、発表により、確認する。

■まとめと発展

学習活動のポイント

❶「土佐日記」における和歌の役割を考える。 知技(1)オ・(2)エオ 主態 →**「言語活動」1**

❶共通の心情を詠む歌を引き合いに出すことにより、どのような効果が生じているか、考えさせる。和歌が周囲の人々へどのような影響を与えているのかにも留意する。

【評価】 我が国の言語文化に特徴的な表現の技法とその効果について理解しているか、確認する。

・時間の経過による文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解しているか、確認する。

・歴史的な文体の変化について、日記文学が、日記文学が単なる事実の記録にとどまらず、作者の思想や人々の心情を掘り下げることのできる文学形態であることに理解を深めているか、確認する。

・進んで日記文学の特徴や成立の背景や助動詞「べし」の意味と用法を理解し、学習課題に沿って、「青海原」「都にて」の歌に込められた心情を考え、作者が「青海原」の歌を引用した理由を話し合おうとしているか、分析する。

発問例

●七七ページ

問 **「日悪しければ」（2行目）とはどのような状態か。**

答 船が出航できないような天候の悪さ。

補 風向きが悪いなど考えられる。また、一説には吉凶のことだとも考えられている。

問 **二十日の月は何時頃出るか。**

答 夜十時過ぎ。

補 月の出は、多少のずれはあるが、十五夜が夜六時頃、それから一日に五十分ぐらいずつ遅くなってゆく。

問 **「指も損なはれぬべし」（4行目）とあるが、なぜか。**

答 大きい数を数えるために、何回も指を使うから。

問 **「見てや」（7行目）の「や」の結びについて説明せよ。**

答 「漢詩作りなどしける。」の「ける」が、結びになっている。

補 係助詞と結びとの間が離れているので、注意させる。

問 **「かの国人」（8行目）とあるが、どこの国の人か。**

答 唐土。

補 「かしこの漢詩」（同・9）、「唐土とこの詠嘆。

語句の研究

●七七ページ

2十九日　承平五（九三五）年正月十九日。

2日悪しければ　天気が悪いので。前日の記事に「海荒ければ、船出ださず」とあるのに対応。

3心もとなければ　不安なので。

4指も損なはれぬべし　指折り数える日が多すぎて、指も痛めてしまうに違いない。諧謔的な表現。

5いとわびし　実に辛い。

5寝も寝ず　眠れもしない。名詞「寝（い）」を係助詞「も」が受ける形。

6二十日の夜の月出でにけり　月齢二十日の月は、だいたい夜の十時を過ぎて出る。十五夜の月は日没とともに出、十六夜の月は「いざよひ」、十七日の月は「立ち待ち」、十八日の月は「居待ち」、十九日の月は「寝待ち」というように、月の出の時刻はだんだん遅れ、二十日以後の月は深夜以降に出る。この時期は「宵闇」となる。また、夜明け後も西や南の空に残るので、これを「有明の月」とも言う。「に」は完了の助動詞「ぬ」の連用形。「けり」はこの場合は

6山の端もなくて、海の中よりぞ出で来る　教科書では省略したが、あとに「都にて山の端に見し月なれど波より出でて波にこそ入れ」の歌があり、「山の端」とわざわざ断っているのは、山に囲まれた京に生い育ち、京を生活の本拠として来た作者の自然の感情であろう。海の中から出る月に一種新鮮な感興を覚えて「海の中よりぞ出で来る」と強い感動を示しているのである。一月八日の記事にも「今夜月は海にぞ入る」とある。「山の端」は山の上部の空に接する部分。なお、二十日の停泊地を室津とすると、半島の西側に当たり、海から月が出ることはないとされる。貫之の脚色か、あるいは停泊地に変更があったのかも知れない。

7かうやうなる　後に「月」が省略されている。「かうやう」は「かくやう」のウ音便。

7見てや　「や」は疑問の意をあらわす係助詞。この結びは推量の助動詞であることが多い。「や」の結びは、あとの「漢詩作りなどしける」の「ける」である。結びは「けむ」とありたいところであるが、「けり」は「伝聞」に基づく過去を回想する助

国」（P七八・3）などの表現に注意させる。

問 ◉**「かしこ」（9行目）とは、どこのことか。**

答 唐土。

問 **「漢詩」（9行目）に対するものは何か。**

答 和歌。

補 大和歌の意であるが、平安時代初め、外国詩である漢詩流行によって日本古来の歌と区別する必要が生じてからの称である。

問 **「その月」（10行目）とは何を指すか。**

答 仲麻呂の見た月。

補 貫之も同じ海に出る二十日の月を見ているので、注意深く読んでいくようにさせる。

問 **「これを見てぞ」（10行目）の「ぞ」の結びについて説明せよ。**

答 本来「詠めりける歌」の「ける」にかかって結ぶところ、文が続いていったので結びが流れた。

補 「結びの消滅」「結びの解消」ともいう。

問 **「かかる歌」（11行目）とはどのような歌か。**

答 和歌。

補 直前の「我が国」は勿論日本のことである。

●七八ページ

問 **「言の心を、男文字にさまを書き出だし」（1〜2行目）とは、どのようにしたというのか。**

動詞で「…とかいうことだ」の意を表すので、疑問の係助詞をうけても不自然に感ぜられなかったのであろう。「や」を感動の意をあらわす間投助詞とみる説もある。

7阿倍仲麻呂　文武天皇二（六九八）年〜宝亀元（七七〇）年。中務大輔船守の子。十六歳のとき遣唐留学生として渡唐、玄宗皇帝に仕えて名を朝衡と改めた。天平勝宝年間、遣唐使藤原清河に従って帰国しようとしたが、風波のために果たさず、再び唐にもどった。のち粛宗に仕え、宝亀元年かの地で没した。七十三歳という。「言ひける人」の「ける」は伝聞に基づく過去の助動詞「けり」の連体形で、「…とかいった」「…だそうだ」の意。仲麻呂の話は人づてに聞いた昔話であるという気持ちを表現する。

7帰り来ける時　実際には仲麻呂は途中で暴風に遭い安南に漂着、唐にもどって住みつくことになる。

8馬のはなむけ　「門出」語句の研究参照。

9飽かずやありけむ　名残がつきなかったのだろうか。「飽かず」は「満足しない」「物足りない」の意。「けむ」は過去推量の助動詞。上の「や」を受けて連体形になっている。この部分は挿入句的に独立している。

10これを見てぞ　係助詞「ぞ」は下の「とて、詠めりける歌」の「ける」にかかるが、「ける」が連体形なのは直接下の「歌」に接続するためであって、ここで文が終止しないため、結びは流れた。

10仲麻呂の主　「主」は人名の下に添えて敬意を表す語。一月八日の記事に、「業平の君」とあるので、「主」は「君」よりも敬意は軽く、中流階級出身の人に用いたらしい。

11詠ん給び　「詠み給び」の撥音便。「給ぶ」はバ行四段活用の尊敬の補助動詞、意味は「給ふ」に同じ。

14青海原……　「古今和歌集」巻九羇旅には初句「あまの原」とある。おそらく貫之がここにふさわしいように改作したのであろう。なお古今集左注に「この歌は、昔、仲麿を唐土に、物習はしに遣はしたりけるに、数多の年を経て、え帰りまうで来ざりけるを、この国より又使まかり至りけるにたぐひて、まうで来なむとて、出で立ちけるに、明州と言ふ所の海辺にて、かの国の人、餞　別しけり。夜に成りて、月のいと面白くさし出でたりけるを見て、よめるとなむ語り伝ふる」とある。なお、この時の

答 歌の意味を漢字で書いて、の意。

補 「男文字」は漢字のことで、平仮名を「女手」というのに対している。平仮名は平安期になって女性たちの手によって使われてきたのでこう呼ぶ。男性はもっぱら漢字を使用していたので、貫之が平仮名で「土佐日記」を書いたのは画期的なこととされる。なお、仲麻呂の時代は「女手」はまだ作られていない。

問 **◉「ここの言葉」（2行目）とあるが、どこの言葉か。**

答 日本の言葉。

補 「ここの言葉伝へたる人」の「ここ」は、『土佐日記』の作者の立場から見ての「ここ」であり、日本語を習い覚えていて現地の人に伝達する人の意だが、通訳と考えて良い。ただし、仲麻呂はその時点で三十数年現地にいたので、通訳の必要はなかったと考えられる。貫之の脚色と考える。

問 **◉「賞でける」（3行目）の主語は誰か。**

答 かの国人。

補 この直前の「心をや聞き得たりけむ」も同じ。

問 **「言異なる」（3行目）とはどのようなことか。**

答 使う言葉が中国語と日本語とで違うという「馬のはなむけ」が二十日に行われたという確証はない。「振り放け見れば」は「ずっと遠く見わたすと」。「振り放く」の連用形に「見る」が付いたもの。「ふりむいて遠くを見る」。「三笠なる」の「なる」は存在を表す断定の助動詞で、この場合、連体形であることが多い。「三笠の山」は奈良市奈良公園の東にある山。御蓋山とも書き、春日山ともいう。契沖（けいちゅう）の「古今余材抄（こきんよざいしょう）」によれば、遣唐使はこの山で塞の神を祭ったという。「かも」は詠嘆の意をあらわす終助詞。

14春日　現在の奈良県奈良市街東方の丘陵地を指す。三笠山（御蓋山）もこれに含まれる。

● 七八ページ

1聞き知るまじく思ほえたれども　「（日本語なので）理解できまいと思えたけれども。」「聞き知る」は複合動詞。「聞いて理解する」「聞いて悟る」「聞きわける」の意。「まじく」は打消の推量を表す助動詞「まじ」の連用形。「思ほえ」は「思ふ」に上代の自発の助動詞「ゆ」がついて一語となったもの。「思はゆ」→「思ほゆ」→「覚ゆ」と変化した。

1言の心　歌の意味。「言」はここでは「歌」の意。

1男文字　男手。漢字のこと。平仮名を女手というのに対する言い方。

2さま　ようす。外形的な状態をいう語。ここでは「心」が歌の内部的な意味や気持ちをいうのに対して、「さま」は歌の大体の筋、趣をいう。「男文字にさまを書き出だして」は和歌の意味の概略を漢詩か漢文かに翻案し書き示したというのであろう。

4月の影　月の光。

4人の心も同じことにやあらむ　「（それに対して動く）人の気持ちも同じことであるのだろうか。」「同じ」はシク活用形容詞の連体形。この形容詞に限って、連体形が「同じ」「同じき」と両様に用いられる。「に」は断定の助動詞「なり」の連用形。「や」は疑問の係助詞。また「ありけむ」といわないで「あらむ」としたのは、単に仲麻呂の故事を回想する気持ちだけでなく、そこから離れて、作者自身の感想を一般的に述べるためであろう。「あら」は、補助動詞としての用法。

5そのかみ　当時。仲麻呂が歌を詠んだ当時。

5思ひやりて　想像して。

こと。

問 **「月の影」（4行目）を現代語訳せよ。**

答 月の光。

補 ここでは「月」そのものと取ってもよい。「月」と「人の心」とを対応させている。

問 **「人の心」（4行目）とは、ここではどのような「心」か。**

答 故郷を懐かしむ心。

補 中国では「月」を見て故郷を思うことがしばしば漢詩に詠まれている。

問 **「ある人」（5行目）とは誰か。**

答 作者（紀貫之）。

補 女性仮託に伴う第三者的表現である。

鑑賞

阿倍仲麻呂（六九八年～七七〇年）は、今でも日本人になじみの深い、人気の歌人である。それはその歌によるところも大きいが、やはりその劇的な生涯が人々の心をとらえるのであろう。

遠い異国の地にとどまり、ふるさとを夢見つつ帰ることのできなかった、それは一つの文学パターンとして、人々をとらえた。「平家物語」の俊寛僧都のように、足摺をして叫びつつも、ついに帰国はかなわなかった例もある。

仲麻呂の歌は「古今和歌集」に伝えられている、「あまの原ふりさけ見れば春日なる三笠の山にいでし月かも」が原型である。「新撰和歌」、「百人一首」にもこの形で収められている。

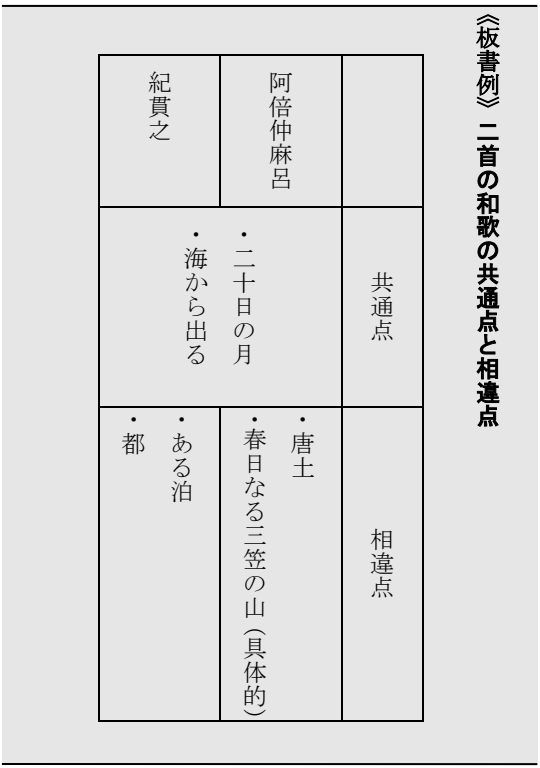
仲麻呂が遣唐使として唐土に渡ったのが養老元（七一七）年、唐朝の官吏としてかの地にとどまること三十数年を経て、同じく遣唐使の藤原清河・吉備真備らの一行と帰国しようとしたのが、天平勝宝五（七五三）年であった。この一首はそのときの歌と考えられる。仲麻呂はこの後故国に向けて出発するが、清河、仲麻呂の乗った船は難破し、大陸に押し戻されてしまう。他の船は薩摩に上陸するが、それには後に日本に帰化する鑑真（六八八年～七六三年）が乗っていた。仲麻呂は、結局帰国を断念し、異国の土に化したのである。

従って、この歌は、難破の後のものではないということになるから、帰国の期待、喜びの中で詠まれたということになるが、唐土に三十五年もいた後であるから、望郷の歌と考えられてきたものであろう。

この歌が実際どこで作られ、どのようにして我が国に伝えられたかは不明であるが、仲麻呂の作と考えられてきたのはすでに平安初期のことらしく、当然、貫之は自ら撰に携わった「古今和歌集」に仲麻呂の作としてとったはずである。

仲麻呂の悲劇から百五十年経た紀貫之の時代にも、仲麻呂は常に人々に思い出されていた。「土佐日記」の旅の途次、月を見て、貫之は書かずにはいられなかったということであろう。土佐出発以来すでに一ヶ月近く過ぎた長い船旅で、一月二十日の時点ではもう十日も同じ所に足止めされた後であるからなかなか都にたどり着けないという気持ちが、いっそうこの歌を思い出させたのであろうか。

ただし、貫之は、文芸作品として、この歌や仲麻呂の説話・歌に改変を加えるなど、脚色を施している。この態度は、「土佐日記」全編を貫く精神でもあった。


《板書例》二首の和歌の共通点と相違点
阿倍仲麻呂
紀貫之
共通点
・二十日の月
・海から出る
相違点
・唐土
・春日なる三笠の山（具体的）
・ある泊
・都

深い学びのために

学習のポイントの解答例

1 **「指も損なはれぬべし。」（七七・4～5）とあるが、どのような心情が表現されているか、考えてみよう。**

【答】 天候が悪く、何日も同じところで足止めをしなければならない状態を悲嘆している。このままだと、日にちを数えるのに何回も指を使って、指を痛めてしまうと諧謔味を込めて表現している。故郷へ帰るだけに余計に望郷の念が募る心情が表現されている。

▼ポイント▲ 心情を問われている。本文を取り入れながら、その部分に即した心情を考えるとよい。

2 **「二十日の夜の月出づるまでぞありける。」（七七・9～10）とあるが、どのような状況だというのか、「二十日の月」の出がいつ頃かを調べたうえで、考えてみよう。**

【答】 二十日の月は午後十時を回らないと出て来ない。つまり、長時間にわたって、別れを惜しんで、送別の宴をはっていたことを表現しようとしている。

▼ポイント▲ 月の出は季節によって多少異なるものの、新月の時が朝八時ごろでそれから少しずつ遅くなる。十五夜の満月の時が午後六時ごろで、もっとも月が見やすい。また、この場面では作者が実際に二十日の月の出の様子を見ながら、同じ状況の仲麻呂のことを思い出すという趣向となっている。

3 **「心をや聞き得たりけむ」（七八・2～3）とあるが、誰がどうしたのいうのか、説明してみよう。**

【答】 かの国人（唐の人々）が、仲麻呂の歌の意味を理解した、ということ。

▼ポイント▲ 「心」はその前の「言の心」（七八・1）のこと。大和言葉で書かれた和歌を漢語（漢文）に翻訳して、通訳に伝えさせたということである。

言葉と表現の解答例

1 **次の各文を傍線部に注意して、それぞれ現代語訳してみよう。**

(1) **指も損なはれぬべし。（七七・4～5）**
(2) **船に乗るべき所にて（七七・8）**
(3) **月の影は同じことなるべければ（七八・4）**

【答】 (1) 指までも傷めてしまいそうだ。(2) 船に乗るはずの所で。(3) 月の光は同じであるはずであるから。

▼ポイント▲ (1) 意味は「推量」。強い推量で「～するに違い

ない」などとも現代語訳できる。(2)　意味は「当然」。このような用法を「予定」と考えることもある。(3)　意味は「当然」。

言語活動の解答例

1　**「青海原」「都にて」のそれぞれの歌に込められた心情を考え、作者がなぜ「青海原」の歌を日記に引用しているのか、話し合ってみよう。**

【答】（意図）和歌に込められた心情を読み取ると二首の和歌に込められた心情が共通していることが分かる。そこから阿倍仲麻呂の話の引用の理由を考える。

（手順）

1　それぞれの和歌を読解したうえで、そこに込められた心情を考える。二首に共通しているのはなかなかたどり着けない故郷への思いである。

・青海原……青々とした大海原のはるかかなたの空を見渡すと、ちょうど今上がってきたあの月は春日にある三笠山の上に出た月と同じ月なのだなあ。

・都にて……都では稜線から出るのを見た月であるが、ここでは波間から出て波間に沈むことだよ。

2　二首に共通した心情を理解したうえで、自分の歌に先立って阿倍仲麻呂の歌を引用した理由を考える。作者の現在置かれている、故郷へ向かっているのに天候の関係で足止めされ思うようにならない状況が、阿倍仲麻呂の唐からの日本への帰国が思うようにいかず、望郷の念に駆られている状況と重なり、自分たちの思いが分かりやすく説明されるのではないかと考えている。

（ゴール）故郷への思いは時代を超えて共通であることを読み取り、自分たちの住んでいるところへの愛着を感じさせるようにしたい。

▼ポイント▲　まず、和歌を現代語訳したうえで、共通の心情が読み取れることに留意する。さらに、作者と仲麻呂が置かれた状況にも共通点があることに気付けば、和歌を引用した理由が考えられる。

（畠山　俊）

帰京

要旨

帰京してみると自宅は荒廃しており、留守を預かっていた隣人を薄情に思う。枯れた松の中に小松が生えているのを見て、亡くなった女子への思いを新たにし、和歌を詠みあげる。思いは尽きず、この日記を破り捨てようと思う。

構成

段落	ページ・行	段意
第一	初め～P七九・6〈志はせむとす。〉	帰京して家に着いて様子を見ると、屋敷は荒廃していた。留守を預かっていた隣人の心の荒れ具合も分かった。それでもお礼はしようと思う。
第二	P七九・7〈さて〉～終わり	屋敷の池のほとりの松も半ばは枯れている。新しく生えた小松が交じっているのを見て、女の子を亡くした悲しみを新たにし、歌を詠むが、思いは尽きない。この日記を破り捨てようと思う。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については巻末参照。）

①京（きやう）　に　入（い）りたち　て　うれし。　②家（いへ）　に　至（いた）り　て、　門（かど）　に　入（い）る　に、　月（つき）　明（あ）かけれ　ば、　いと　よく　ありさま　見（み）ゆ。

格助・帰着　タ四・用　接助・理由　形シク・終　格助・帰着　ラ四・用　接助・単接　格助・帰着　ラ四・体　接助・単接　形ク・已　接助・順理　副　形ク・用　ヤ下二・終

①京に入っていったのでうれしい。②家に着いて、門に入ると、月が明るいので、たいそうよく（屋敷の）様子が見える。③聞いていたのにもまして、

③聞き（カ四・用）　し（過・体）　より（格助・比基）　も（係助・強意）　まし（サ四・用）　て、（接助・単接）　言ふかひなく（形ク・用）　ぞ（係助・強意（係））
こぼれ破れ（ラ下二・用）　たる。（存・体（結））　④家（格助・対象）　に　預け（カ下二・用）　たり（存・用）　つる（完・体）　人（格助・体修）　の　心（係助・同類）　も、
荒れ（ラ下二・用）　たる（存・体）　なり（断・用）　けり。（詠・終）　⑤中垣（係助・強意（係））　こそ　あれ、（ラ変・已・結）　一つ家（格助・体修）　の
やうなれ（比・已）　ば、（接助・順理）　物（係助・同類）　も　絶え（ヤ下二・未）　ず（打・用）　得（ア下二・未）　させ（使・用）　たり（存・終）。　⑦今宵（連）、かかる　こと
に（格助・時間）　物（係助・同類）　も　絶え（ヤ下二・未）　ず　得（ア下二・未）　させ（使・用）　たり（存・終）。　⑥さるは、便りごと
と、（格助・引用）　声高に（形動ナリ・用）　もの（係助・強意）　も　言は（ハ四・未）　せ（使・未）　ず。（打・終）　⑧いと（副）　は（係助・強意）　つらく
見ゆれ（ヤ下二・已）　ど、（接助・逆確）　志（係助・区別）　は　せ（サ変・未）　む（意・終）　と（格助・引用）　す。（サ変・終）

⑨さて、（接）　池（カ四・用（イ音））　めい（接助・単接）　て　くぼまり（ラ四・用）、水（カ四・已）　漬け（存・体）　る　所（ラ変・終）　あり。　⑩ほ
とり（格助・場所）　に　松（係助・同類）　も　あり（ラ変・用）　き。（過・終）　⑪五年（格助・体修）　六年　の　うち（格助・時間）　に、千年
や（係助・疑問（係））　過ぎ（ガ上二・用）　に（完・用）　けむ、（過推・体（結））　かたへ　は（係助・区別）　なく（形ク・用）　なり（ラ四・用）　に（完・用）　けり。（過・終）
⑫今（副）　生ひ（ハ上二・用）　たる（完・体）　ぞ（係助・強意（係））　交じれ（ラ四・已）　る。（存・体（結））　⑬おほかた（格助・主格）　の、　みな（副）　荒れ（ラ下二・用）
に（完・用）　たれ（存・已）　ば、（接助・順理）　「あはれ。」（感）　と　ぞ（係助・強意（係））　人々（格助・引用）　言ふ。（ハ四・体（結））

お話にならないくらい壊れいたんでいる。④家に託しておいた（留守番の）人の心も、（家と同様に）すさんでいるのであったよ。⑤（隣家とは）隔ての垣根はあるが、一つの屋敷のようであるので、（隣家から）望んで預かったのである。⑥そうではあるが、ついでがあるたびに贈り物も絶えず受け取らせていた。⑦今夜は、このようなまだ（屋敷がひどく荒れている）と、（皆に）大声で言わせたりしない。⑧実に（隣家が）薄情だと思われるが、（留守を預かってくれた）お礼はしようと思う。

⑨ところで、池のようにくぼんで、水がたまっている所がある。⑩そばに松もあった。⑪（留守にしていた）五、六年のうちに、千年が過ぎてしまったのであろうか、一部分はなくなってしまっていた。⑫新たに生えたのが交じっている。⑬だいたいが、すっかり荒れてしまっているので、「ああ（ひどい）。」と人々は言う。⑭思い出さないこととてなく、恋しく思われる中で、この家で生まれた女の子が、一緒に帰

⑭思ひ出でぬ　こと　なく、　思ひ恋しき　が　うち　に、　この
ダ下二・未　打・体　形ク・用　形シク・体　格助・体修　格助・場所　代　格助・体修

家　にて　生まれ　し　女子　の、　もろともに　帰らね　ば、　いかが
格助・場所　ラ下二・用　過・体　格助・主格　副　ラ四・未　打・已　接助・順理　副

は　悲しき。⑮船人　も　みな、子　たかり　て　ののしる。⑯かかる
係助・強意　形シク・体　係助・同類　副　ラ四・用　接助・単接　ラ四・終　連

うち　に、　なほ　悲しき　に　堪へ　ず　して、　ひそかに　心　知れ
格助・時間　副　形シク・体　格助・対象　八下二・未　打・用　接助・単接　形動ナリ・用　ラ四・已

る　人　と　言へ　り　ける　歌、
存・体　格助・相手　八四・已　完・用　過・体

生まれ　し　も　帰らぬ　ものを　わが　宿　に　小松
ラ下二・用　過・体　係助・同類　ラ四・未　打・体　接助・逆確　代　格助・体修　格助・場所

の　ある　を　見る　が　悲しさ
格助・主格　ラ変・体　格助・対象　マ上一・体　格助・体修

と　ぞ　言へ　る。⑰なほ　飽か　ず　や　あら　む、
格助・引用　係助・強意（係）　八四・已　完・体（結）　副　カ四・未　打・用　係助・疑問（係）　補動・ラ変・未　推・体（結）

また、かく　なむ。
副　副　係助・強意

⑱見　し　人　の　松　の　千年　に　見　ましかば
マ上一・用　過・体　格助・主格　格助・比喩　格助・変化　マ上一・未　反仮・未　接助・順仮

遠く　悲しき　別れ　せ　まし　や
形ク・用　形シク・体　サ変・未　反仮・終　係助・反語

忘れがたく、口惜しき　こと　多かれ　ど、　え　尽くさ　ず。⑲とまれ
形ク・用　形シク・体　形ク・已　接助・逆確　副　サ四・未　打・終　副

らないので、どんなに悲しいことか。⑮同じ船で帰ってきた人も皆、子供が寄ってたかって大騒ぎしている。⑯こうした中で、やはり悲しい思いに耐えきれずに、こっそりと気持ちを分かってくれている人と詠んだ歌、

生まれしも…（《この家で》生まれた女の子も帰ってこないのに、わが家に《新たに生えた》小松があるのを見るのは悲しいことよ。）

と言った。⑰それでも飽き足りないのであろうか、さらに、このように（詠む）。

⑱見し人の…（かつて見た人《亡くなった女の子》が松のように千年の寿命をもつものと見ることができたら、遠く《土佐の国で》悲しい別れをしたであろうか。いや、しなかっただろうに。）

忘れがたく、残念なことが多いけれど、書き尽くすことはできない。⑲ともかく、早く（こんな日記は）破ってしまおう。

かうまれ、疾(と)く破(や)りてむ。
副 | 形ク・用 | ラ四・用 | 強・未 | 意・終

学習活動のポイント

導入

学習活動のポイント

❶ 帰京した日付を確認し、土佐を出発して二か月弱経過していることに注意する。

❶ P七四の地図を使って確かめさせる。

展開

学習活動のポイント

❶「帰京」を音読する。思判表(1)ア

❷ 重要古語の意味・用法を確認する。知技(1)ウ・(2)ウ
→「言葉と表現」1

❸ 現代語訳し、段落ごとに内容を確認する。知技(1)エ 思判表B(1)アイ
→「学習のポイント」1

❹ 二首の和歌を鑑賞する。思判表B(1)エ
→「学習のポイント」2

❶全文を通して音読する。「うれし」「つらし」「恋し」「悲し」などの語に注意しながら一気に通読することで、作者の心情の動きを大づかみにすることができる。

【評価】 文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、音読により、確認する。

❷接続助詞「ば」の用法を確認する。「こそ…已然形」の逆接用法は確実に理解させたい。係り結びの挿入句を指摘させ、機能を理解させる。

【評価】 我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしているか、ペーパーテストにより、確認する。

・古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解しているか、ペーパーテストにより、確認する。

❸「今生ひたる」（七九・8）「かくなむ」（同・14）などの下に適語を補って現代語訳させる。段落ごとに、作者の目に映るものとそれに触発された心情とを整理させ、作者の心情の変化を理解させる。

【評価】 文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解しているか、確認する。
・文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、授業中に指名し、部分の現代語訳により、確認する。
・作者の心情の変化について、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈しているか、段落ごとに整理させることにより、確認する。

❹和歌に用いられる動植物などには固定的なイメージを帯びているものも多く、ここでは松の持つイメージを、小松引きなどの習俗も紹介しながら理解させ、鑑賞に役立たせる。

【評価】 二首の和歌に込められた心情について、作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めているか、意見交換をさせ、発表により、確認する。

《板書例》 作者の心情の変化

心情の変化	心情が引き起こされる元になった事実
うれし	京に入りたちて
←	
つらく	言ふかひなくぞこぼれ破れたる
←	
悲しき	この家にて生まれし女子の、もろともに帰らねば

まとめと発展

学習活動のポイント

❶ 末尾における作者の心情を考え、その箇所と冒頭を読み比べる。 知技(1)ア・(2)エオ 主態 →**「言語活動」1**

❶第二段落は作品全体の末尾であり、冒頭の女性仮託と呼応していることに注意させたうえで考えさせる。「破ってしまおう」と言いながら実際には残っていることの意味を考えさせる。仮名日記文学を作者自身どのように考えていたか。末尾の一文について話し合わせる。

【評価】 言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解しているか、確認する。
・時間の経過や地域の文化的特徴などによる文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解しているか、確認する。
・歴史的な文体の変化について、日記文学が単なる事実の記録にとどまらず、作者の思想や人々の心情を掘り下げることのできる文学形態であることに理解を深めているか、確認する。
・進んで日記文学の特徴や成立の背景や、和歌などの表現の工夫を味わい、学習課題に沿って、最後の一文と「土佐日記」の冒頭部との対応について話し合おうとしているか、分析する。

指導上の注意点と発問例

●七九ページ

問　**「聞きしより」（3行目）とあるが、誰が、どこで、何について「聞きし」なのか。**

答　作者（貫之）が、任地（土佐の国）で、都の我が家の様子について。

問　**「言ふかひなく」（3行目）について、これは、筆者のどのような気持ちを述べたものか。**

問　**2　ここでの意味を次の中から選べ。**
(ア)取るに足りない　(イ)何とも言いようがない　(ウ)いやしい　(エ)つまらない　(オ)ふがいない

答　1　口に出して言いようもないほど驚きあきれる気持ち。2 (イ)

問　**「家に預けたりつる人の心」（3行目）という言い方は、「家を預けたりつる人の心」という言い方とどう違うか。**

答　事実を普通に表現した後者に対し、前者は「家」が主で「人」が従であるかのような言いなしになっており、皮肉な表現と言える。

問　**「人の心も、荒れたるなりけり。」（4行目）には、どのような心情が表れているか。**

答　隣人の無責任ぶりを改めて感じた人間不信の気持ち。

語句の研究

●七九ページ

2京に入りたちて　一行は承平五（九三五）年二月十六日に帰京した。ここでは「入り込む、深く入る」の意。「入って立つ」という意ではない。「秋のけはひ入り立つままに…」（「紫式部日記」）なども、秋の気配が立ったことを言うのではなく、深まってゆくことを言う。京の市中に入り、家に近づいていくうれしさであろう。

2家　前土佐守の家。貫之の家は現在の京都御苑内、京都御所の東南の仙洞御所の辺りにあったと伝える（「無名抄」「拾芥抄」）。

2月明かければ　二月十六日、望月（満月）に近い十六夜の月の頃。本文の直前に「夜更けて来れば」とあり、月もかなり高く上っていたと考えられる。

3言ふかひなく　「言ふかひなし」は言ってもどうにもならないさま。

3こぼれ破れたる　「こぼれ」は「毀れ」で、「壊れる」の意。

3家に預けたりつる人の心　難解な箇所で、「を」と代替できる「に」と見て「家を預けたりつる」と同じとする説（小西甚一）、「に」に累加・添加の作用を認めて「家だけでなくそのうえに、預けておいた人の心も」とする説（萩谷朴）など諸説ある。ここでは、家の荒れ具合から預かっていた隣人の誠意の有無が分かるので、人の心を家に託したようなものだという皮肉な表現であるとする説（鈴木知太郎）に従う。これでは、人に家を預けたのか、家に人を預けたのか分かったものではない、と隣人の無責任さに対する不満を皮肉に表現したというのである。

4なりけり　断定の助動詞「なり」の連用形＋詠嘆の助動詞「けり」の終止形。荒廃した家を見た今、隣人の心のすさみように初めて気づいた、という気持ち。

4中垣こそあれ　「中垣」は隣家との隔ての垣根。「こそ…已然形」で文が終止せずに先に続いていく場合、逆接のニュアンスで解釈すべきことが多く、ここも「中垣はあるけれども」の意。

5望みて預かれるなり　主語は隣人。自分から管理を申し出ておいてこの荒れようは何だ、という作者の不満が表現されている。

5さるは　ラ変動詞「さり」の連体形に係助詞「は」が付いた形に由来するといわれ、

問「中垣こそあれ」（4行目）について、
①「こそあれ」を文法的に説明せよ。
②この部分を現代語訳せよ。

答 ①「こそ」は強意の係助詞。「あれ」はラ変動詞「あり」の已然形で結びだが、ここで切れないで下へ逆接の関係で続いている形。
②（隣家とは）隔ての垣根はあるけれども。

問「望みて預かれるなり。」（5行目）について、誰がそうしたのか。

答 隣家の人

問「望みて預かれるなり。」（5行目）と記す作者の心情を答えよ。

答 自分から管理を申し出ておいて屋敷を荒らしてしまった隣人への怒り。

問「さるは」（5行目）とは、ここではどのような意味か。

答「そうではあるが」という逆接の意。

問「便り」（5行目）とは、ここではどのような意味か。

答 ついで。機会。

問「物」（5行目）とは、具体的には何を指しているか。

答 贈り物（心づけの品物）

問◉「かかること」（5行目）とは、どのようなことを指しているか。

答 土佐守在任中、京の家を留守にしているうちに、家がどうしようもなく壊れいたんで屋敷の内の具体的な描写に移っていく。

7池めいて「池めい」は「池」に「それらしくなる（見える）」の意を添える接尾語「めく」が付いてできた四段動詞「池めく」の連用形のイ音便形。ここは、かつて池であったものが池めいた窪みになり、じくじくとした水たまりになっていたと皮肉を込めて言ったもの。次の「松もあったのに、一部はなくなっていた」と対応している。
一説に、屋敷内の池を謙遜して言ったとする。

7水漬ける所　水がたまっている所。

7松もありき「き」は直接体験の過去の助動詞。任国に赴任する以前の邸内の様子。

8千年や過ぎにけむ　下の「かたへはなくなりにけり。」の理由を推測する疑問の挿入句。常緑で千年の長寿を誇ると考えられた松が枯れたのは千年が過ぎ去ったからかという疑問で、管理を怠った隣人への皮肉。

8かたへ　一部分。

8今「今」はニュアンスの多様な語で、ここは旧に対する新の意。

9あはれ　喜怒哀楽によって深く感動したときに発する語。屋敷内全般が荒廃しているのでいちいち取り上げることができず「あ前に述べられたことを受けてその別の側面に着目する表現。前後の事柄が矛盾する場合には逆接的に「そうではあるが」と解し、矛盾しない場合には「というのは、そのうえ」などと解釈する。ここは逆接で、こちらが頼んだのではなく、隣人から望んで預かったのではあるが、という気持ち。

5かかることと、声高にものも言はせず
「かかる」は「かくある」に同じ。家が荒廃していることを指す。従者や家人の憤慨の言葉を制止する前土佐守は、事を荒立てることを好まない人物であることが分かる。
「言はせず」を「隣人に弁明させない」の意に採る説もあり、それなら「かかること」は管理が行き届かなかった事情を指し、本文中には指示内容が存在しないことになるので、採らない。

6いとはつらく「は」は強調の係助詞。形容詞「つらし」はここでは「薄情だ」の意。

6志　本来はある方向へ向かう気持ちのことだが、その気持ちを表すための物品を贈ること及びその物品を指すようにもなった。ここはそれで「お礼」の意と採る。

7さて　副詞「さ」に接続助詞「て」が付いてできた語で、ここでは話題の転換を表し、

いたこと。

補 家人が久しぶりに家を見て、あまりの荒れ様に憤慨して発した言葉であることに注意する。

問 **「声高にものも言はせず。」「いとはつらく見ゆれど、志はせむとす。」（6行目）から作者のどのような人柄がうかがわれるか。**

答 たとえ不誠実な相手であっても、事を荒立てることを好まず、礼節は尽くそうとする人柄。

問 ◉**「いとはつらく見ゆれど」（6行目）とあるが、誰が、誰のことを、どのように思っているのか。**

答 作者（貫之）が、自分の家を預かってくれた隣の人のことを、実に薄情だと思っている。

問 **「志はせむとす。」（6行目）について、[易]1「志」とは、具体的にどうすることか。[中]2そう考えたのは、なぜか。**

答 1感謝の気持ちを表すお礼の品を贈ること。2形だけでも留守の家を預かることを申し出てくれた好意に対してはお礼をするのが良識であると考えたから。

問 **「ほとりに松もありき。」（7行目）とは、いつのことを述べている文か。**

補 答 土佐の国に赴任する以前。非過去を基本とする文章の中で過去の助動

あ」と声をあげるしかなかったのである。

10この家にて生まれし女子の、もろともに帰らねば 任国への赴任時にはなく帰宅後見出された新生の松との対比で、赴任時には同行したのに任地で亡くなった女の子のことが思い起こされる。その気持ちが一首目の和歌に表現される。

11いかがは悲しき 「いかが」は疑問の副詞。ここでは程度を問う「どんなに」の意。「いかにか」の変化という。疑問の副詞を受ける述語は連体形で結ぶ準係り結びの法則により、「悲しき」となっている。

11船人 作者と同じ船で帰京した人々。

11たかりて 群がって。

12心知れる人と言へりける歌 「心知れる人」は前土佐守（作者）の妻を指すか。子供に囲まれて騒いでいる同行者たちから切り離されたように感じ、それを共有できる人である。「言へりける」の主語は、無敬語であることから作者に仮託された女性とも思われるが、後に「なほ飽かずやあらむ」とその心中を推測しているので仮託された女性から見た作者だと考えられる。このようなあいまいさは、日記の作者を第三者の女性に仮託したために生じている。

13生まれしも… 「し」は過去の助動詞「き」の連体形の準体法で、下に「子」などを補って解釈する。「ものを」は逆接の接続助詞。「見るが悲しさ」は「体言（連体形）＋が＋形容詞語幹＋さ」で、「…は～なことだ」の意の詠嘆表現。

14なほ飽かずやあらむ 下の「また、かくなむ」の理由を推測する係り結びの疑問の挿入句。

14かくなむ 下に「詠める」「言へる」などを補って解釈する。前歌の詠み手がさらに詠んだと考えるのが通説だが、「心知れる人」が詠んだとする説もある。

●八〇ページ

1見し人の… 「見し人」は「かつて見た人」の意で、ここは亡くなった女の子を指す。「見ましかば」の主語は詠み手で、「松のように千年の寿命をもつものと（私が）見ることができたら」の意。反実仮想なので、実際はそうすることはできず死んでしまったといういっそうの悲しみを帯びた歌になっている。「遠く」は「遠く土佐で」の意と「永遠に」の意とを掛ける。「ましや」の「や」は反語で、「…しただろうか、いやしなかっただろうに」の意。

詞「き」が用いられていることに注意。

問 **「千年や過ぎにけむ」（8行目）は、一文中でどのような働きをしているか。また、このように言う作者の気持ちを答えよ。**

答 「五年六年のうちに、かたへはなくなりにけり。」という事実の理由を作者が推測する働き。係り結びの疑問の挿入用法。松を枯らしてしまった隣人の管理のずさんさを皮肉る気持ち。

問 **「今生ひたるぞ交じれる。」（8行目）を現代語訳せよ。**

答 新たに生えた松が交じっている。

補 「たる」は完了の助動詞の連体形の準体法。下に「松」を補って現代語訳する。

問 **「おほかたの」（9行目）の「の」を文法的に説明せよ。**

答 主格を表す格助詞

問 **「あはれ。」（9行目）と言う人々の状況を具体的に説明せよ。**

答 荒廃が屋敷の全般に及んでいるので、いちいち指摘できずにただ「ああ」と声をあげるしかない状況。

問 **「生まれしも」（13行目）を現代語訳せよ。**

答 生まれた女の子も。

補 この「しも」は過去の助動詞「き」の連体形＋強意の係助詞「も」。「し」は準体法。

問 **「わが宿に小松のあるを見る」（13行目）の「が」「悲し」い理由を説明せよ。**

答 土佐に行く前にはなかった小松が生えているのを見て、「小」から「子」が連想され、逆に、この家で生まれた女の子が土佐で死んで帰ってこなかったことへの悲しみが新たになったから。

問 **「ひそかに心知れる人と言へりける」（12行目）とあるが、「ひそかに」言うのはなぜか、理由を説明せよ。**

答 帰国した人々が、連れて帰った子供たちや、都で帰りを待っていた子供たちと、再会を喜んでいるさまに、愛児を亡くした孤独な思いをいっそう募らせるとともに、なおかつ人々の久し振りの再会の喜びに水を差さないように遠慮もしているから。

問 **「生まれしも」（13行目）の歌と、「見し人の」（八〇・1行目）の歌に共通する「悲しさ」はどのようなものか、説明せよ。**

答 この家で生まれた女の子が任地（土佐の国）で死に、一緒に帰ってこない悲しみ。

問 **「なほ飽かずやあらむ」（14行目）を現代語訳せよ。**

答 それでも飽き足りないのであろうか。

問 **「なほ飽かずやあらむ」（14行目）は誰の立場からの、どのような言葉か。**

答 作者に仮託された女性の立場からの、「ある人」が重ねて歌を詠む理由を推測する言

---

2 口惜しき 他人や事態の成り行きが期待通りではなく、がっかりする気持ちを表す。

2 多かれど 普通の形容詞ではカリ活用は助動詞の接続のため以外はほとんど用いられないが、「多し」だけは特殊な活用形を持ち、終止形「多かり」、已然形「多かれ」がしばしば用いられた。

2 え尽くさず 「え」は打消と呼応して不可能を表す副詞。「書き尽くすことができない」。ここでの文の流れとしては、忘れがたく、残念なことが多いが、とても書き尽くすことができないということ。一方、作品冒頭の「いささかにものに書きつく」と対応していると見ると、記録として少しばかり書きつけるつもりだったのに、さまざまなことを書き連ねてしまって、それでも書き尽くすことができないということ。

2 とまれかうまれ 「ともあれかくもあれ」の「もあ」がつづまり、「く」がウ音便化したもの。「あれ」は命令形の放任法。「あってもこうでもかまわぬ」という気持ち。

2 疾く破りてむ 「この日記を早く破ってしまおう」。「て」は強意（確述）の助動詞「つ」の未然形。作品冒頭の「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてする

葉。係り結びの疑問の挿入用法。

問 **「かくなむ」（14行目）の「なむ」の結びはどうなっているか。**

答 「詠める」などの言葉が省略されている。

●八〇ページ

問 **「見し人」（1行目）とは、誰のことを指すか。**

答 作者の、土佐で亡くなった娘のこと。

補 直訳だと「見た人」となるが、これは土佐に赴く以前に京で「見た人」ということで、作者の娘のことになる。その娘は土佐で亡くなっているので、過去形に意味があることになる。

問 **「忘れがたく、口惜しきこと」（2行目）の中で、いちばん痛切な事柄は何か。**

答 この家で生まれた子が任地で亡くなり、一緒に帰ってこなかったこと。

問 **「破りてむ。」（2〜3行目）の「てむ」を文法的に説明せよ。**

答 強意（確述）の助動詞「つ」未然形＋意志の助動詞「む」終止形。

補 助動詞「つ」「ぬ」は推量の助動詞「む」「べし」などが下に続く場合、強意（確述）の意となり、「きっと…」「たしかに」と訳す。

問 **「破りてむ。」（2〜3行目）とあるが、作者は何を破ろうというのか。また、そのように言う気持ちを答えよ。**

答 この日記。残しておく価値のないものという謙遜の気持ち。

なり」に対応した偽装の表現。作者の「読むべき内容のものでない」とするポーズの表れから破り捨てようとした。それは逆に言えば、男性漢文日記の公的性格や記録性を脱して人生の真実を描き出す仮名日記文学が誕生したと宣言していることにもなる。

鑑賞

強く希求しつづけた京へ、承平五（九三五）年二月十六日、ついに一行は帰ってきた。喜びはひとしおである。ところが、落ち着くべき我が家は、月明かりの中に無残に荒廃した姿をさらしていた。留守を預かっていた隣人の管理がずさんだったのである。帰京の喜びも束の間、世人の薄情さを思い知らされることになった。

荒廃した屋敷を見回す一行には、「あはれ。」という嗟嘆の声以外、言葉も出てこない。そのような中、作者の目に新たに生えた小松が入ってくる。それは対比的に土佐で亡くなった女の子を思い起こさせ、子を亡くした親としての悲嘆も新たに募る。

居宅の荒廃、隣人の不人情、亡児への悲傷はいずれも作者を深い喪失感に誘うものであるが、この日記を記したとき、貫之を取り囲む情勢は極めて厳しいものであった。彼の土佐在任中に、醍醐天皇、宇多上皇、藤原定方（ふじわらのさだかた）、同兼輔といった庇護者たちが相次いで世を去っており、帰京した彼は、有力者の庇護もなく、土佐守の次の官も得られず、多くのものを失った状態にあったのである。「忘れがたく、口惜しきこと多かれど、え尽くさず。」という末尾の文言は、そのような作者の心情の表れであり、荒涼たる屋敷の風景は、彼の心情の形であったと見ることも可能であろう。

それにしても、「疾く破りてむ。」とは言うものの、この日記は破棄されることなくむしろ流布していったのであり、真意とは異なる偽装の表現である。多くの虚構を交えながらつづられてきたこの作品の大尾として誠にふさわしいと言えるだろう。

コラム

「作者」の女児は実在したのだろうか？

『土佐日記』の面白さを生徒に伝えるのは、なかなかに難しい。助動詞「なり」の解説を交えながら（→言葉の学習1）、「男もすなる…」という「門出」の有名な冒頭部分について文法的な説明をしたり、作者が女性に扮する形で書かれた作品の虚構性について解説したり…。さまざまなアプローチが考えられるが、どうも一方的な知識の伝達に終始してしまいがちである。

そこで、『土佐日記』の虚構性について生徒に実感してもらうために、「作者の『女子』は本当に存在したのか？」という問いかけを想定してみたい。「帰京」においてとりわけ印象的であるのは、任地で亡くしたという女児を追慕する叙述である。帰京する喜びと裏腹に、不在の女児を追懐することで表面化する喪失感が、痛々しいまでに読者の心を打つ。

一方で、作者・紀貫之が任国の土佐国から帰京したのは承平五（九三五）年、六十歳を超える年齢であったと考えられる。先入観を持ちすぎてはならないが、幼い女児がいたというのは現実的にはどうも考えにくい。もしそうならば、任地で女児を亡くしたという叙述そのものが、作者による虚構の産物だということになる。

「子どもの死を安易に扱うなど不謹慎だ」という印象を、生徒達は抱くかもしれない。しかし、裏を返せば、作者の虚構性に対する拘りがそこまで切実なものであった、ともいえよう。作品全体に強烈な哀感を漂わせて読者を引きつけるための手段として、虚構としての我が子の死を描くという「不謹慎」さを、作者は引き受けたのである。

冒頭の女性仮託の方法だけではなく、『土佐日記』にはこうした虚構の世界が随所にみられることを確認しておきたい。

（小林　俊洋）

《板書例》 作者の心情の変化

心情の変化	心情が引き起こされる元になった事実
うれし	京に入りたちて
←	
つらく	言ふかひなくぞこぼれ破れたる
←	
悲しき	この家にて生まれし女子の、もろともに帰らねば

深い学びのために

学習のポイントの解答例

1 **前半の段落において、作者の心情はどのように移り変わっているか、まとめてみよう。**

【答】 まず、入京を果たした「うれしさ」が述べられている。次に、家を見て、想像以上に荒れていることに、言いようもないほど「ひどい」ことだと嘆いている。そして、家を預けた隣家を「薄情だ」と思いながらも、お礼はきちんとしようと考えている。

▼ポイント▲ 「うれし」「言ふかひなし」「つらし」などの心情を表す形容詞をポイントにして、その心情をもたらすものが何であるかを考えながらまとめていく。

2 **「ほとりに松もありき。」（七九・7）とあるが、「松」と「生まれしも」、「見し人の」の二首の歌はどのように関連しているか、説明してみよう。**

【答】 初めの歌には「小松」が出てくる。もちろん「小」には「子」が掛けられており、そこから「亡き子」を連想させるようになっている。また、新しく生えてきたことが生命の誕生ということで、対比的に子供の死が意識されることになる。二番目の歌には「松の千年」という言葉がある。「松」は常緑であることから生命力の象徴として捉えられている。ここにも短命で亡くなった自分の子供と長寿を予想させる「松」との対比が見られる。「松」と「亡き子」とを重ねることにより実景の「松」と歌とを結び付けている。

▼ポイント▲ 「松」と二首の歌との関わりを考えるのであるから、歌の中に「松」がどのように扱われているかを考える。「小松」と「松の千年」のそれぞれの言葉に着目する。そうするとそれが両語とも「亡き子」と結び付くことが分かるので、それについて説明することになる。二首目の歌は内容がとりにくい部分があるので、言葉を補いながら解釈し、検討する必要がある。

言葉と表現の解答例

1 **次の各部は下の部分とどのような関係で続いているか、説明してみよう。**

(1) **中垣こそあれ（七九・4）**

(2) **見し人の松の千年に見ましかば（八〇・1）**

【答】 (1) 逆接。「こそ～結び」が切れずに下に続く場合、逆接となる。

(2) 反実仮想。「まし」という助動詞が反実仮想の意味があり、下の「まし」と対応している。

▼ポイント▲ (1)は係り結びが成立しているにもかかわらず、文が終止せず、下に続いていく特別な用法であることから考える。

⑵は「～ましかば～まし」の典型的な用法。

言語活動の解答例

1　**「忘れがたく、口惜しきこと多かれど、え尽くさず。とまれかうまれ、疾く破りてむ。」（八〇・2～3）とあるが、この部分は、作品の冒頭部（七四ページ）とどのように対応しているのか、話し合ってみよう。**

【答】（意図）「土佐日記」の冒頭部と末尾の部分とを読んでいるので、両者を比較して、作者の作品全体への思いを読み取る。

（手順）

1　冒頭部から作品全体に関わりそうな部分を抜き出す。さらに、末尾の部分でも同様の作業を行う。

「門出」からは「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり。」「そのよし、いささかにものに書きつく。」の部分を抜き出す。「帰京」からは「忘れがたく、口惜しきこと多かれど、え尽くさず。」「とまれかうまれ、疾く破りてむ。」の部分を抜き出す。

2　抜き出した箇所を読み比べ、対応関係を調べる。最初の一文は女性仮託の宣言であり、それは「自分のこと」を書くという宣言であり、「そのよし、……」の部分も同様の宣言と読めるから、「忘れがたく……」の部分と対応する。そして、そのような私的なものなので、「とまれかうまれ、……」と結ぶことになるのであろう。ただし、これは本心ではなく、従来に無い文学作品を創出するという作者の思いが込められており、そのために今に伝えられていると考えてよい。

（ゴール）この作品がひらがなで書かれていることの重要性を理解させたい。橋本氏の文章も参考にしながら、「自分のこと」、つまり私的内容を文学作品にするという意欲的作品であることに気づかせたい。

▼ポイント▲　冒頭部と末尾から対応している語句を抜き出して並べてみる。それらの意味するところを考えながらまとめていくとよい。

（畠山　俊）

男と女の文章

橋本 治

作者

橋本治

昭和二十三（一九四八）年～平成三十一（二〇一九）年。小説家・評論家・随筆家。東京都の生まれ。東京大学文学部国文科卒。昭和五十二年「桃尻娘」で講談社小説現代新人賞佳作を受賞。以後、ユニークな発想と独特の軽妙な文体で、エッセイ、小説、評論、古典現代語訳等、多彩な執筆活動を展開した。主な著書に「桃尻娘」（昭五十三）、「桃尻語訳枕草子」（昭六十二）、「宗教なんかこわくない！」（平七）、「「三島由紀夫」とはなにものだったのか」（平十四）、「蝶のゆくえ」（平十六）、「双調平家物語」（平十～十九）がある。

出典

本文は「これで古典がよくわかる」（ちくま文庫　筑摩書房　平十三）によった。教科書に収録するに際して、漢字・送りがな・句読点などについては教科書として統一した体裁に改めた。

学習活動のポイント

■導入

学習活動のポイント

❶ 作者について理解する。

❶教科書所収の作者紹介項目を用いて、小説家・評論家・随筆家など、多彩な執筆活動を行った作家であるとともに、日本の古典文学に関する造詣も深いことを解説する。

■展開

学習活動のポイント

❶ 本文の黙読をする。

❷ 平安時代の日記について、男性のものと女性のものの違いについて、文体と内容の面からまとめる。知技(1)ウエ 思判表 B(1)ア　→「学習のポイント」1

❸ 平安時代の男性の日記について、誰がどのような名前の日記を遺しているか、調べる。知技(2)エオ 主態　→「学習のポイント」2

❶読めない語句については、辞書などで調べるよう指示する。

❷本文に書かれていることを丹念に拾って、男女が対照的になるようにまとめさせる。

【評価】 我が国の言語文化の文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしているか、確認する。

・文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解しているか、確認する。

・男女の日記の違いを、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、ノートなどの提出物により、確認する。

❸藤原道長「御堂関白記」藤原実資「小右記」藤原行成「権記」などがある。資料集やインターネットなどを活用して調べさせる。図書館に翻刻や影印本があれば、手に取らせ、どのようなことが書かれているかを確かめさせる。

【評価】 時間の経過による文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解しているか、確認する。

・歴史的な文体の変化について理解を深めているか、確認する。

・進んで日記文学の特徴や成立の背景や、平安時代の日記について、男性のものと女性のものの違いを理解し、学習の見通し

をもって、平安時代の男性の日記について調べようとしている　か、分析する。

■ まとめ

学習活動のポイント

❶「門出」を読み返し、男性の日記と女性の日記のあり方の違いを考え、女性に仮託した意味を考える。［知技(1)ア・(2)ウ］［思判表B(1)エ］

❶女性に仮託するという虚構の方法について理解させる。

【評価】言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解しているか、確認する。
・古典の世界に親しんでいるか、確認する。
・「男と女の文章」を読むことで、「土佐日記」の文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めているか、ノートなどの提出物により、確認する。

発問例

●八一ページ

問 **「そういう種類のもの」（上2行目・13行目）とあるが、それぞれどのようなものか。**

答 仕事上、公式の場で明らかになっていることが書かれたもの。
個人の経験を、その時の心情も含めておもしろく読んでもらえるように書いたもの。

補 前のものは男性の日記を指し、後のものは女性の日記を指す。両者の違いが分かるようにまとめるとともに、「日記の形をした小説」とあることに留意する。

語句の研究

●八一ページ

上10紀貫之・土佐日記　単元５「作者」「出典」参照。

上10婉曲表現　直接的にではなく、遠回しに表すこと。

●八二ページ

上1政界秘話　政治の世界で個人的に知ることになった一般的には知られていない話。

上15右大将道綱母　生年未詳～長徳元（九九五）年。藤原倫寧の娘。藤原倫寧は、いわゆる受領層の貴族であり、子には作者のほかに歌人藤原長能、菅原孝標の妻（「更級日記」の作者の母）らがいる。作者は天暦八（九五四）年に藤原兼家と結婚し、翌年道綱を産んだ。家集に「道綱母集」がある。

上15蜻蛉日記　日記。作者は藤原道綱母。天延二（九七四）年以降、まもなく成立。藤原兼家の妻であった作者が、兼家の求婚から筆を起こし、満たされぬ結婚生活に悩み、母との死別、子、道綱への愛、物詣でなど、天暦八（九五四）年から二十一年間の出来事を告白的に述べたもの。女流日記の先駆的作品である。

上15和泉式部日記　日記。作者は和泉式部。ただし主人公の女性を、作中では「女」と記すなど客観的な叙述がなされていることから、作者は別の人物であるという説もある。寛弘七（一〇一〇）年頃までに成立。敦道親王との愛のいきさつが歌物語風につづられた作品で、長保五（一〇〇三）年四月から翌年一月までの記事が収められている。

上15紫式部日記　日記。作者は紫式部。寛弘七（一〇一〇）年頃成立。寛弘五（一〇〇八）年八月から寛弘六（一〇〇九）年元旦までの宮仕えの日記を主とする。前半は、彰子の皇子出産に伴う華やかな行事の様子など、宮廷生活の記録と随想、後半は、人物批評や芸術上の諸問題を論じた文章で構成されている

上16菅原孝標の女　寛弘五（一〇〇八）年～没年未詳。父孝標は菅原道真の子孫であり、伯母には「蜻蛉日記」の作者藤原の道綱の母がいる。「浜松中納言物語」「夜の寝覚ざめ」などの作者とも言われている。

上16更級日記　日記。作者は菅原孝標女。康平三（一〇六〇）年頃成立。作者が十三歳の頃、父の任国、上総の国を出発して京に上ってから、五十三歳に至る頃までの体験を回想して書いたもの。少女時代の浪漫的な夢や

物語への憧れが、現実の世界に破れ、信仰の世界を求めていくようになる心情が記されている。

上18清少納言　生没年未詳。歌人や学者を多く輩出した清原氏の出身で、父元輔は「後撰和歌集」の撰者の一人。正暦四（九九三）年頃、関白藤原道隆の娘で一条天皇の中宮（後に皇后）定子のもとに出仕し、長保二（一〇〇〇）年に定子が亡くなるまで仕えた。家集に「清少納言集」がある。

上19枕草子　随筆。作者は清少納言。長徳二（九九六）年～長保三（一〇〇一）年頃成立。三百余段から成り、内容は、「もの尽くし」と言われる類聚的章段、自然や生活に関する随想的章段、宮仕えでのさまざまな見聞を記した日記的章段の三つに大別され、洗練された美意識や鋭い観察眼、豊かな知性が看取される。

学習のポイントの解答例

1 **平安時代の日記について、男性のものと女性のものはどのように異なっていたか。文体と内容の面からまとめてみよう。**

【答】 男性のものは漢文で書かれており、内容は公式な政治上、仕事上知り得たことを、備忘録的に記したものである。女性のものはひらがなで書かれており、内容は私的な経験とその際の自分の心情を中心に記したものである。

▼ポイント▲ 本文に書かれていることを丹念に拾って、男女が対照的になるようにまとめていけばよい。

2 **平安時代の男性の日記について、誰がどのような名前の日記を残しているか、調べてみよう。**

【答】「御堂関白記」藤原道長　「小右記」藤原実資　「権記」藤原行成

▼ポイント▲ ほかにも多くの日記が残されている。これらは行事の様子を詳しく書くことにより後々の参考とするといった意味も持ち合わせていた。暦に従って吉凶や天候などが記されることもある。

古文の窓❹ 真名と仮名

教材のねらい

『土佐日記』や『竹取物語』、『伊勢物語』などの作品は、平安時代の「仮名文学」と呼ばれる。この単元で学習した『土佐日記』は、「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり」という宣言に基づく、仮名による日記の試みである（当時の「男もすなる日記」は、藤原道長の『御堂関白記』や藤原実資の『小右記』などのように漢文日記だった）。「阿倍仲麻呂」の段には仲麻呂の歌意を唐土の人に漢字で示して理解し合う場面があるなど、『土佐日記』は文字表記に意識的な作品である。新しい学習指導要領では「伝統的な言語文化」を学ぶことも立項されており、「古文の窓」では教材の読解を受けて日記が綴られた文字に着目し、生徒が日本語の文字の由来を学びつつ、その豊かさに気づき理解を深めることをねらいとする。

解説

教科書で読む「仮名文学」は、実際には読みやすいように適宜漢字をあてた「漢字仮名交じり文」であり、文字も変体仮名を用いたくずし字でなく、楷書で書かれている。「仮名文学」は文学ジャンルの名称としてのみ認識されがちで、今日の活字テキストから表記としての「仮名」を意識することは少ないかもしれない。なお、変体仮名とは、「現在、普通にひろく使用されるものと異なった字体のひらがな。特に明治三三年（一九〇〇）小学校令施行規則で採用されたひらがなと比べて、字源またはくずし方を異にするかな」（『日本国語大辞典』）を言う。

「漢字」と「仮名」の関係は、「古文の窓」の標題に掲げたように、「真名（まな）」と「仮名」の関係にあったことが重要である。すなわち、「仮名」は「真名」に対する「かりそめの文字」であり、「仮名文学」はそのかりそめの文字で書かれた文学であるという側面を持つ。文字の選択は公・私の領域や、八十一頁で橋本治氏が指摘する当時の「男の文章と女の文章」の問題にも関わる。『土佐日記』には「漢詩（からうた）はこれにえ書かず」という一文があるが、「真名」で書かれた詩が避けられているのは、女性（実は作者は紀貫之）が「仮名」で書いた日記という設定ゆえである。その枠組みは後の『源氏物語』にも引き継がれていると考えてよかろう。『大鏡』の「三船の才」の逸話なども思い起こされる。この「古文の窓」をきっかけに、生徒には「仮名文学」の「仮名」、および日本の文字の歴史について関心を持ってほしい。

『土佐日記』が「仮名文学」であることを実感するには、「変体仮名」を学習するとよい。仮名が漢字から作られたことは小学校でも学ぶはずだが、それぞれの仮名がどの漢字から作られたかを言い当てることは案外難しいし、ふだんの生活でそれを確かめる場面にはあまり出くわさない。「寸」から「す」、「乃」から「の」が作られたことは字形から察しがつきやすいが、「た」が「太」、「ひ」が「比」、「み」が「美」から作られていることなどは今日の活字書体からはなかなか想像しにくいのではなかろうか。加え

て、「は」の字母の一つに「者」があり、八十三頁の看板図版にも用いられているが、これは音読みの「シャ」や訓読みの「もの」ではなく漢文の置き字として読むときの「は」に基づく。そういった歴史に触れることで、私達がふだん使っている文字のあゆみをかいま見ることができるし、東アジアの漢字文化圏の中で日本文学をとらえ直す契機にもなるだろう。

　変体仮名の学習と言えば、仮名字体表や活字テキストと見比べながら写本・板本（版本）の複写を読み進めるというのが典型的なスタイルであろうが、近年になって学習用のスマートフォンのアプリも開発された。二〇一五年に早稲田大学とカリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）により共同開発された「変体仮名あぷり」や、翌年大阪大学を中心に開発されたくずし字学習アプリ「KuLA」が知られる。日本古典文学を学ぶ大学生も行き帰りの電車などでトレーニングに励んでいると聞く。そういったアプリを活用した新しい学習法も授業の中で紹介したい。古典研究を志す者に限らず、幅広い関心から気軽に変体仮名に接しやすくなったという点で大きな意義があると言えよう。

　変体仮名・くずし字で書かれた書物を読むこととその環境についても述べておきたい。

　この単元で学習した『土佐日記』の冒頭は嘉禎二年（一二三六）の藤原為家自筆写本の写真が「単元の言語活動５」（八四ページ）に載っているが、変体仮名を学習することでこのような書物の元の姿に接することができるようになる。国文学研究資料館の「国文学研究資料館「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」や、資料を所蔵する各機関により、古典籍のデジタル公開が進んでいる。

　古典籍を変体仮名・くずし字で読めるようになることについて、中野三敏氏は「和本リテラシー」の回復を提言した。『和本のすすめ―江戸を読み解くために』には以下の一節がある。

　和本リテラシーとはやや大げさな言いようだが、平たく言えば変体仮名と草書体漢字、いわゆる「くずし字」の読解能力を言う。明治以前はほとんどそれしかなかった文字表現であり、我々の父親世代（明治生まれ）までの読書人は、なお辛うじて持ち続けていたに違いない能力である。では平成の現時点ではどうか。語学・文学・歴史の分野で江戸以前を専攻する研究者、及びその卵を基盤として、おそらく三千人、その他多く見つもっても五千人には届くまい。総人口の〇・〇〇四パーセントということになる。一方、日本の読書人で古典を不必要と言い切れる人はおそらくあるまい。今、その人たちのほとんどが〇〇文庫、〇〇叢書の活字本によってそれを愛読する。そしておそらくその内の大多数の人は、必要な古典はほとんど既に活字化されているものと御考えなのではなかろうか。無論それが事実であるならば、和本リテラシーなど今さら不必要とされても当然である。では、明治以前に出来た和本の総点数はどれほどあるものか。一つの手懸りであるが、有名な『国書総目録』全八巻の収録点数は約五十万点という、加えるに、私などの貧弱な経験から勘案しても、『国書』未収録の和本はやはり五十万点はあろう。合わせて百万点を超すというのが妥当な数ではなかろうか（これでもかなり内輪な計数のつもりである）。その内容はおよそ人智

のあらん限りのものが書物化されていよう。それは全方位的に存在し、形而上から形而下まで、あらゆる領域に及ぶ。さて、その中のどれほどが活字化されているのだろうか。それは文芸作品から生活文化のあらゆる領域に至るまでを見つもっても、とても一万点を超すとは思われない。とすれば、活字化されたものは総数のわずか一パーセントにも満たぬことになる。

変体仮名・くずし字の読解ツールとして、ＡＩの活用が始まっていることも紹介しておこう。たとえば、人文学オープンデータ共同利用センター（CODH）により「くずし字ＯＣＲ」が開発され、活字テキストと同じ要領での読み取りが目指されている。「みを（miwo）―ＡＩくずし字認識アプリ」や「デジタル源氏物語」のように、その能力を活用した研究ツールや教材も生まれつつある。古典の分野においても今後は人間とＡＩの協働といった場面が増えてゆくことだろう。

参考

・笠間書院叢刊刊行会『字典かな―出典明記』（改訂版）笠間書院、一九八八年。
・児玉幸多『くずし字用例辞典』（普及版）東京堂出版、一九九三年。
・小松茂美『かな―その成立と変遷』岩波新書、一九六八年。
・中野三敏『和本のすすめ―江戸を読み解くために』岩波新書、二〇一一年。
・マイケル・エメリック「変体仮名あぷり」『てんてこまい―文学は日暮れて道遠し』五柳書院、二〇一八年。
・川添愛『言語学バーリ・トゥード―ＡＩは「絶対に押すなよ」を理解できるか』東京大学出版会、二〇二一年。
・「変体仮名あぷり」
https://apps.apple.com/jp/app/変体仮名あぷり/id1053735914
・「くずし字学習支援アプリ　KuLA」
https://kula.honkoku.org/
・「みを（miwo）」
http://codh.rois.ac.jp/miwo/
・「デジタル源氏物語」
https://genji.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/

単元の言語活動５

変体仮名を読む

活動のねらい

教科書や資料集の図版には古い時代の写本が使われていることがある。美しいなと何となく眺めるのもよいが、日本の伝統的な書記法を学び、幅広く古典に対する関心を持ってもらいたいと考え、そのことをねらいとしている。変体仮名と呼ばれるその書記法は「古文の窓４」にもあったように、現在のひらがなに通ずるものである。慣れると驚くほど速く読み進めることができるようになる。また、本文についても「、」や「。」の位置などを含め、いろいろと考えることもでてくるかもしれない。そのようなことを体感してもらうこともねらいである。

タイトル・序文の解説

ここでは『土佐日記』「門出」の部分を変体仮名で表したものを題材にひとつひとつの字母を確認しながら読んでいく。活字で読むことが当然だと思っている古文であるが、教科書で読むような形になるまでには多く手がかかっている。ポイントになる箇所を取り上げながら変体仮名を読む体験を味わいたい。

「課題」の解説

課題　**変体仮名を読んでみよう。**

それぞれの活動に入る前に図版１をざっと見て現代のひらがなとほとんど変わらないような字があることに注目させたい。例えば後ろから２行目の冒頭などは「れいのこと」と読むことができる。本文を確認してみると「例のこと」となっている。「れい」は漢字には直してあるが、仮名表記としては問題なく読むことができる。そのような箇所を導入として何か所か、生徒何人かで読み合わせてから活動に入ってもよいだろう。難なく読める箇所があることは生徒のなじみやすさにつながる。

「活動」の解説

１　**現代の平仮名と字母が異なる仮名を読んでみよう。**

①　図版２の「仮名字体表」から、図版１の□で囲った部分の字母となっている漢字を探す。

図版２は仮名字体表になっている。ひとつ気をつけたいこと

は現代語では仮名は基本的にひとつだが、古文ではひとつの仮名に対応する字体が複数あるものが存在することである。現代の仮名の元になったものはそれでも読みやすいが、現代の仮名とまったく関係のない、そのうえあまり使わない音が対応しているものが使われる場合はとまどうことだろう。しかし、いずれにしても数は限られているので、慣れれば見分けることができる。まして、今回は字が指定されており、教科書本文と合わせればそれがどの仮名であるかも容易にわかる。そのようなことを手掛かりとして字母となっている漢字を探すことになる。

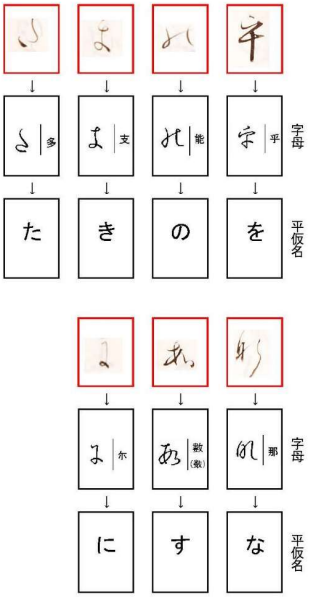
初めの字は「を」である。字体表では分かりづらいが、字母に「乎」があるので想像できる。二番目の字は「な」である。字体表を見ると「那」が当てはまると分かる。三番目は「の」であり、字体表から「能」が見つかる。四番目は「す」、字母は「数」、五番目は「き」、字母は「支」、六番目は「に」字母は「尓」、最後は「た」、字母は「多」である。通常用いている仮名の字母と異なる字母であっても読み解くことができたのではないだろうか。大切なことは「読める」と感じることであって、このような書記法になじむことである。

②　□で囲った部分を平仮名に置き換える。

①の活動で字体表すべてから探して字母を見つけた人はこの段階でそれぞれの字母を現代仮名に直す。もちろん、先立って①の段階でそれを行った人はそれが済んでいることになる。

知技(2)イ　主態

〈ワークシート記入例１〉



2　図版１を「門出」（七四ページ）の本文と比べ、本文中で句読点が付けられている箇所に句読点を加えてみよう。

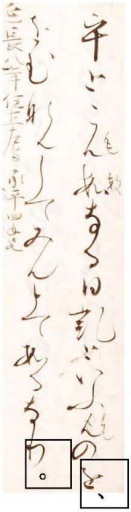
ある程度読めるめどが立ったところで、気づいたことを指摘させてもよい。漢字と仮名との使い分け、段落最初の一字空け、句読点の有無などが指摘されるであろう。試しに図版１を、字母を仮名に直して書き出してみるとよい。意外に読みにくいのではないだろうか。教科書に載っているものが、いかに形が整えられているものであるかに気づくだけでも大いに意味があろう。

活動としては本文と丁寧に合わせて句読点を付け加えていくことになる。基本的に一字一音であることを伝え、教科書本文と図版を忠実に比べていくようにする。今回の活動は学校の

実情に合わせて臨機応変に活動を組み替えるとよい。自主的に生徒が読み取っていける場合はすべての活動をいっぺんに行うことも可能であろうし、そこまではできない場合は教師が適宜段階を分けたり、アドバイスを加えたりすればよい。くずし字を読み解くことが目標ではあるが、くずし字に慣れることがより重要である。何かの機会にくずし字を目にした際に、まったく関心を持たずに素通りしてしまうのではなく、読めるかもしれないから読んでみようという気持ちになるようにして、作業を終えるようにしたい。また、「書」（書道）や展覧会等に展示してある写本などにも興味を持てるようにしたい。

知技(2)イ　主態

〈ワークシート記入例２〉



▼評価のポイント▲正しい字母を見つけることができたか、句読点を正しく打てたか、などをワークシートで確認することは可能であるが、意欲的に読もうとしていたか、変体仮名に興味を持ち今後も触れようという気持ちを持てたか、などを観察によって評価してもよい。

評価規準

〔知識・技能〕(2)イ　古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解している。
〔主体的に学習に取り組む態度〕　進んで日記文学の特徴や成立の背景、真名と仮名について理解し、今までの学習を生かして、変体仮名を読もうとしている。
◎学習指導要領の言語活動例との関連
〔思考力・判断力・表現力等〕　B(2)ア

（畠山　俊）

言語活動ワークシート　月　日〔　年　組　番　名前　〕

◆教科　言語文化　古文編　単元の言語活動５

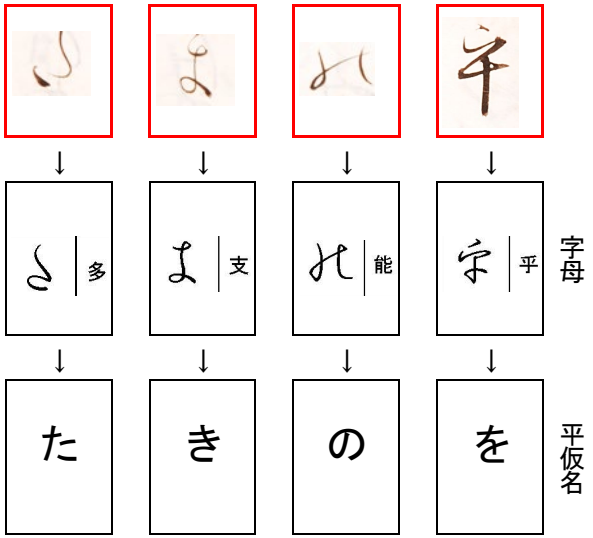
◆変体仮名を読む

課題　変体仮名を読んでみよう。

1 現代の平仮名と字母が異なる仮名を読んでみよう。

①図版２の「仮名字体表」から、図版１の□で囲った部分の字母となっている漢字を探す。

②□で囲った部分を平仮名に置き換える。



2 図版１を「門出」（七四ページ）の本文と比べ、本文中で句読点が付けられている箇所に句読点を加えてみよう。

